

通 信



日 仏 東 洋 学 会

日仏東洋学会

会 長：中谷英明

名誉会長：Bernard THOMASONN

顧 問：興膳宏

評 議 員：Didier DAVIN・Marc-Henri DEROCHE・濱田正美・飯島
孝良・岩尾一史・彌永信美・門田眞知子・加藤純章・木
島史雄・熊谷誠慈・京戸慈光・牧野元紀・松原康介・御
牧克己・森由利亜・中島隆博・中谷英明・大谷暢順・田
中文雅・土屋昌明・山畑倫志

代表幹事：中嶋隆博

会計幹事：酒井規史 会計幹事補佐：長谷川琢也

監 事：Didier DAVIN・森賀一恵

運営委員会：会長（委員長）、代表幹事、会計幹事、学術・企画委員
長、広報委員長、監事

学術・企画委員会：代表幹事（委員長）、会長、当番幹事（輪番制）

広報委員会：熊谷誠慈（委員長）、岩尾一史（『通信』編集）、手嶋英
貴（『通信』編集）、山畑倫志（ホームページ管理；メーリン
グリスト管理）、飯島孝良（フェイスブック管理）

本部

〒223-0061 横浜市港北区日吉4-4-1

慶應義塾大学 来往舎 酒井規史研究室

『日仏東洋学会通信』編集局

〒600-8268 京都府京都市下京区七条大宮東入ル大工町125-1

龍谷大学文学部 岩尾一史

表紙題字 元・趙孟頫の六体千字文から
高田時雄氏集字

カット イラン陶器模様（13世紀）から
桑山正進氏作

日仏東洋学会会則

- 第1条 本会を日仏東洋学会と称する。
- 第2条 本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に、交流と親睦を図るものとする。
- 第3条 本会の目的を実現するために次のような方法をとる。
- (1) 講演会の開催
 - (2) 日仏学者の共同の研究及びその結果の発表
 - (3) 両国間の学者の交流の促進
 - (4) 仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する
 - (5) 日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する
- 第4条 本部は会計幹事の所属する機関内におく。
- 第5条 本会会員は本会の目的に賛同し、別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。
- 第6条 正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。
- 第7条 本会は評議員会によって運営され、評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 第8条 評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 会長 1名 代表幹事 1名 幹事 若干名 会計幹事 1名 監事 2名
- 日仏会館フランス事務所所長は、本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。
- 第9条 会長は会を代表し、総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。
- 第10条 年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き、会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。
- 第11条 本会の会計年度は3月1日より2月末日までとする。
- 第12条 この会則は総会の決議により変更することができる。
- 第13条 以上の1条から12条までの規定は、2018年3月18日から発効するものとする。

STATUTS DE LA SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DES ÉTUDES ORIENTALES

- Art. 1 Il est formé une association qui prend le nom de Société Franco-japonaise des Études Orientales.
- Art. 2 L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Études Orientales.
- Art. 3 Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants :
- 1 - Organisation de conférences.
 - 2 - Études et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats.
 - 3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays.
 - 4 - Organisation de réunions amicales entre scientifiques français et japonais, notamment à l'occasion des visites des scientifiques français au Japon.
 - 5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.
- Art. 4 Le siège de la Société est établi à l'établissement auquel appartient le trésorier.
- Art. 5 Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation.
- La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.
- Art. 6 La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.
- Art. 7 La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont élus par L'Assemblée Générale. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.
- Art. 8 Le Conseil d'Administration élit dans son sein :
- 1 Président - 1 Secrétaire Général - Plusieurs secrétaires - 1 Trésorier - 2 Auditeurs.
- Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles. Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statutairement président d'honneur. En outre, l'Assemblée Générale peut élire un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.
- Art. 9 Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.
- Art. 10 L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Administration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.
- Art. 11 L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.
- Art. 12 Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.
- Art. 13 Les dispositions statutaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le 18 mars 2018.

目次

論文

- 敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
—古代チベットにおける初期仏教伝道文学作品—
西田愛、今枝由郎、熊谷誠慈

東洋学関係の講演会・ワークショップ

- | | |
|---|----|
| 2018 年土日仏東洋学会シンポジウム「日仏東洋学会を振り返る—ユベール・デュルト先生を追悼しつつ—」 | 19 |
| 講演録①「フランスシノロジーと私」 | |
| 興膳宏 | 21 |
| 講演録②「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」 | |
| 中谷宏明 | 29 |
| 講演録③「フランスのインドシナ研究と日本」 | |
| 藤原貞朗 | 47 |
| 講演録④「日仏日本学・仏教学と私の歩み」 | |
| 彌永信美 | 53 |
| セバスティアン・ヴェグ教授「Lu Xun 魯迅 et sa réception transnationale」特別講演報告 | 61 |
| 国際ワークショップ「外語の熟達から世界の統制へ——近世の東アジアにおける対訳辞書と語彙集を考える」報告 | 63 |

学会活動報告

- 2019年度日仏東洋学会総会についてのお知らせ 65

日仏東洋学会 会計報告

- 編輯後記 68

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』 ——古代チベットにおける初期仏教伝道文学作品——

西田愛、今枝由郎、熊谷誠慈

1. 著作背景

7世紀にチベット史上初の統一国家として中央ユーラシア史上に登場した古代チベット帝国（吐蕃）では、インド、中国、中央アジアなど様々な地域より伝わった仏教が8世紀後半には国教となった。その後、数世紀にわたって継続的に伝播した仏教の歴史はチベットの歴史そのものであるとさえ言われる。しかし、古代帝国時代のチベットでは、仏教はツェンポをはじめとする社会の上層部に受け入れられていた外来宗教の一つに過ぎず、社会全体に受容されるようになるのは帝国が崩壊した後の、おそらく11世紀以降のことである。その時代、すなわち仏教が社会に十分に根付く以前のチベットには、仏教とは根本的に相容れない死生観や蘇生論¹、そしてそれらの基盤となっていた時間論や死後の世界観を持っていた土着宗教が存在していた。初期の仏教伝道者たちは、この土着宗教の信奉者に対して仏教の基本的な教えを説明し、彼らを仏教徒へと改宗させる必要があった。その際、土着宗教の用語に巧みに仏教的意味を込めながら、土着宗教を仏教的に変容させつつ仏教の中へ吸収していったのである。

こうした初期の仏教伝道者たちの布教の様子を物語る、いわば仏教伝道文学作品とみなせる文献群が敦煌出土文書中に存在する。その最たる例が『生死法物語（*Skye shi'i lo rgyus*）』・『置換（*Bsngo ba*）』・『神国道説示（*Lha yul du lam bstan pa*）』三部作である。父王の急逝に直面した神子リンチェンの生死法求法物語である『生死法物語』では、その最後において忌むべき諸々の葬儀の流儀が述べられるが、それらの有効性が否定され、それに代わって父王が天上の安らかなところへ生まれるために有効なダラニの存在が予告される。続く『置換』では、先に『生死法物語』で否定された

¹敦煌出土の『生死法物語』によれば、古代チベットでは、死者が出た場合にその遺族が行うべきことは、まずは死者を蘇らせることであり、それが叶わない場合には死者を「喜びと幸せの国（*dga' dang skyid pa'i yul*）」に送り届けることであった（今枝 2006, p.110）。

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

葬儀の諸要素をチベットの具体的な事例と対照させて、その無益さを説くとともに、それらを仏教的行為へと置き換えることが奨励される。三部作最後の『神国道説示』では、仏教的葬儀に従えば、3種の菩薩²によって死者が善い世界へと導かれることが約束される。そして、最初の『生死法物語』で予告されたダラニに相当するダラニが、ここで開示されるのである。これらの三部作で初期の仏教伝道者たちが最も強調したかったのは、土着の葬儀で行われていた動物供犠の廃止、すなわち殺生を禁止することであった。そして、土着宗教の信奉者にとっては全く新しい輪廻という死生観と時間論、さらに弥勒菩薩の坐す兜率天こそが死後に目指すべき場所であると説くこともまた重要であった。新たな善い時代、仏教的には正法の時代を開く存在である弥勒菩薩のいる世界を、土着宗教の信奉者である当時のチベット人たちが望んだ死後の世界に重ね合わせて説くことで仏教が受容される下地を用意したのである³。

本稿で紹介する『輪廻形態説示（'Khor ba'i tshul bstan pa）』もまた初期の仏教伝道文学作品の一つに位置付けられる作品である。この作品のほかにも、『神変比丘来世説示経（'Phrul gyi byig shus phyi ma la bstan pa'i mdo）』や『三毒調伏（Dug gsum 'dul ba）』などもまた先の三部作に類する内容を持つことが指摘されているが、『輪廻形態説示』は、輪廻という仏教の基本的概念を平易に説明することを目的とした作品であり、古代の土着宗教への言及が少ない点で他の二作品とは少し趣が異なっていると言えよう⁴。

2. 写本の概要

『輪廻形態説示』を収録する写本としては、これまでに3点が確認されている⁵。このうち、Pelliot tibétain 24（以下、P.t. 24）は唯一の完本であり、7音節の韻文による全168偈から構成されている⁶。この写本は29葉からなる折本で、『輪廻形態説示』のほかにも5作品を収録しているが、『輪廻形態説示』はその表面24葉から裏面11葉

² 観世音菩薩、虚空蔵菩薩、悪趣清浄菩薩の3菩薩である（西田・今枝・熊谷 2019, pp.101-102, pp.107-108）。

³ 以上で述べた『生死法物語』・『置換』・『神国道説示』の詳細については、今枝 2006 及び西田・今枝・熊谷 2019 を参照されたい。

⁴ Macdonald 1971, pp.370-373 及び今枝 2006, pp.118-120 を参照。

⁵ ここにあげる3点以外にも、類似する内容を持つ IOL Tib J 602（以下、ITJ 602）が知られている。ITJ 602 の前半部には、『心の輪廻の形態略説（Sems 'khor ba'i tshul mdo tsam du bstand pa）』と題される文献が収録されており、これが輪廻を主題とする文献であることは間違いない。しかし、本稿で扱う『輪廻形態説示』が輪廻の概念を平易に説明するものであるのに対して、ITJ 602 は、輪廻に関する諸説を引用しながら各説を理証と経証のそれぞれによって検証するなど、非常に高度な仏教知識を持つ読み手を対象とした内容の、いわば専門家向けの論書とみなせる文献である。したがって、ITJ 602 は本稿では考察の対象とはせず、稿を改めて紹介することにする。

⁶ 第1偈の作品タイトルは5音節である。

までに記されている。第二の写本である IOL Tib J 316（以下、ITJ 316）もまた複数の作品を収録する折本で、全 58 葉が残存している。ITJ 316 の表面 44 葉から 56 葉にかけて、Pt. 24 の第 51 偈から 168 偈に相当する全 118 偈が収められているが、前半の 50 偈までは写本の欠損によるためか収録されていない。第三の写本 IOL Tib J 335（以下、ITJ 335）は 4 葉のみが残る貝葉本の一部であり、その冒頭に Pt. 24 の 164 偈から 168 偈に相当する 5 偈が残されている。以下では、もっとも整った Pt. 24 を底本とし、必要に応じて他二写本にも言及する。

3. 作品の概要

筆者らの分類によれば、Pt. 24 の内容はタイトルから始まる 13 の段落に分けることができる。以下に、各セクションにつけた便宜上のタイトルとともに、対応する偈の通し番号と内容の概略を記す。

(I) 表題：1 偈

『輪廻形態説示』（＝輪廻のあり様の説明）

(II) 輪廻とは：2-11 偈

人は突如として生まれ、この一生ですべてが尽きるとする考えがあるが、そうではない。心の本質⁷というものがあり、はるか昔から幾多の身体を乗り継ぎながら現在へと至っている。

(III) 輪廻の原因について：12-24 偈

輪廻の原因となるのは悪業や三毒に代表される煩惱である。自らの行為の善悪にしたがって貴・賤、楽・苦の境遇に生まれるのである。そのような生死の諸々の境遇をこれまでも無数に繰り返してきたのである。

(IV) 人間として生まれることの難しさについて：25-30 偈

人間として生まれることは難しく、さらに仏教の教えを聞けるのは非常に稀なことである。今生で、人間として生まれているのは前世の福德の果報である。

(V) 長寿を求めることの無益さについて：31-43 偈

⁷sems kyi rang bzhin

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

時は留まり続けることはないのだから、いつかは死を迎えるのである。すべての形あるものは変化し続ける、すなわち無常である。

(VI) 死期について考える必要性について：44-71 偈

人の一生は短く、100 年を生きたとしても、記憶に残るのは 25 年分ほどである。今日という日に死ぬかもしれないのだから、自身がどこからやってきて死後どこへ行くのかを考えなくてはいけない。

(VII) 死期の助けについて：72-86 偈

自分自身の身体も、親族も友人も、故郷も財産も権力さえも死期の助けとはならない。生まれるのも一人で、死ぬのも一人である。自身が行った善業のみが死期の助けとなる。

(VIII) 悪業をなす者たちについて：87-126 偈

自分自身が行った悪業によって身を滅ぼすことになるのだから、目先の欲望に囚われず、善業を行わなければならない。しかし、蒙昧な有情たちは誤った考え（＝四顛倒）に惑わされ、死を自分自身のこととしてとらえず、死後のことを考えずに罪業を犯してしまう。そして、結局は三悪趣へと連れて行かれるのである。

(IX) 死期の助けとしての仏教について：127-139 偈

死期の助けについて教えてくれるのは、仏法だけである。仏教の目的を達成すべく、自身にとって有益なことを自らが実践すべきである。輪廻の原因となる行為と生死の原因について正しく理解すべきである。

(X) 善き師（善知識）の必要性について：140-153 偈

仏法のすべてを知るためには、善き師（＝善知識）を探さなくてはならない。善き師は、あらゆる善を教え、あらゆる悪から守り、正しい道を教え、あらゆる善を生み出し、煩惱の沼から我々を救い出してくれる存在である。そして、その善き師から正法を聴聞しなくてはならない。

(XI) 正法の必要性について：154-159 偈

正法は、我々を煩惱から癒し、無知の暗闇を晴らし、生死（＝輪廻）によってもたらされる苦しみを取り除いてくれるものである。

(XII) 正法の教えを実践することについて：160-167 偈

人として生まれ、仏教の教えを聴聞できる境遇でありながら教えを実践しないならば、来世で人に生まれることは難しい。輪廻を断ち切るためには、戒律を守り仏となることを目指さなくてはならない。

(XIII) 表題：168 偈

本作品が、未だ仏教徒ではない人々に対して仏教の基本的概念である輪廻について説明するものであることは先にも述べた。もう少し詳しくみるならば、上に提示した各段落の概略によって、作品の大筋は次のように整理することができる。

作者は、生死が今生の一度きりではなく、何度も繰り返行われているのだという輪廻の説明から始め、その原因となっているのは悪業や煩惱であると説く。そして、自らの行為の善悪が、生まれ変わる境遇の違いを生じさせるのだから、今、人として生まれたのは前世の福德の果報であるという。人々は死後のことを考えずに今生での長寿を望んでいるが、誰にでも死は訪れる。ゆえに、生きている短い時間の中で生死について考えるべきであると勧める。そして、死期には、親族も友人も財産も役には立たず自分自身の行った善業だけが助けとなるのだと説き、死後のことを考えずに目先のことに囚われて悪業をなしてしまうと、三悪趣、すなわち畜生道・餓鬼道・地獄道へと落ちることになると戒める。その上で、仏教こそが死期の助けとなる教えであり、仏教によって生死の原因を正しく理解し、その教えを実践するよう勧める。そのためには善き師（＝善知識）を探し、正法を聴聞する必要がある。そうしなければ、来世で人に生まれることは難しいと警告する。

このように、仏教の概念を知らない人々に対して、輪廻という新しい死生観と死後の世界、そして死期に向けて行すべき準備を説明したものが『輪廻形態説示』という作品であろう。それゆえ、より高度な理解を必要とするであろう仏教の最終目的、すなわち解脱については詳しくは説明されず、作品の最後においてわずかに言及されるにとどまっている。

以下では、『輪廻形態説示』の翻訳と翻字テキストを提示する。その際、訳文はチベット文からの厳密な逐語訳ではなく、日本語として理解しやすい翻訳を心がけた。

4. Pelliot tibétain 24 【翻訳】⁸

(I) 表題：1 偈

輪廻形態説示

(II) 輪廻とは：2-11 偈

無常なる輪廻のこの世に生きる無数の衆生はすべて、突如として自ら生まれ、この〔世の〕寿命と時間で〔すべてが〕尽きる〔と考えられているが〕そうではない⁹。〔実際には〕際限のない原始の時から、心の本質¹⁰〔というもの〕があり、〔人が川を渡る時〕船に乗って対岸に渡るのと同じように、身体は心〔を乗せる〕船であって、〔心は〕はるか昔から旅人¹¹としてやって来ているのである。

(III) 輪廻の原因について：12-24 偈

〔人は〕昔〔から〕留まることなく〔生まれ変わって〕、〔悪〕業や煩惱、〔特に三〕大毒¹²によって、輪廻の牢獄である三界¹³の苦悩の監獄など各所において苦しい生死の境遇〔に〕割り当てられているのである¹⁴。そのように、この蒙昧な識¹⁵は絶えず不変であって、自ら〔行う〕善・悪の行為によって貴・賤、楽・苦の境遇に至る。そのような生死の諸々の〔善悪の〕境遇で得てきた無数の〔身体の〕構成要素〔の量を合計すると〕、肉と骨は、須弥山ほどに〔高く積み重なるくらい多く〕、血と膿は、海ほど〔多く〕ある。

(IV) 人間に生まれることの難しさについて：25-30 偈

⁸原文中にはないが、日本語として読みやすいように訳者が補った箇所は〔 〕内に、訳者による注釈は（ ）内に示した。

⁹輪廻の概念を持たない、非仏教徒の考えを否定している。

¹⁰sems kyI rang bzhIn: sems は、ここでは輪廻の主体となる識 (rnam shes) の意味で用いられているものと考えられる。

¹¹'dron po: 敦煌写本にはよく見られる'gron po の同音異綴り。

¹²最も根本的な三つの煩惱である貪 (欲)・瞋 (怒り)・癡 (愚かさ) の三毒を指す。

¹³三界とは欲界・色界・無色界の三世界を指す。我々が住む欲界に限らず、色界・無色界に住まう神々にさえも死は訪れるので、輪廻の牢獄と述べている。

¹⁴kha brlms pa: kha は khar であると考えて、on, upon, above (Jäschke pp.34-35) の意味を採用した。

¹⁵rnam shes: ここでの rnam shes は、7 偈目の sem kyI rang bzhIn と同等の意味を指すと考えられる。すなわち、蒙昧な識というのは、煩惱がなくなっていない心の状態を言ったものであろう。

けれども、人間に生まれるのは難しい。[さらに仏法のある] 国の中央に生まれることは[なおさら] 稀で、[それは] 大海に彷徨っている門の穴に亀が首を入れるようなものである¹⁶。今生で、人間として生まれたのも前世に福德を積んだ果報である。

(V) 長寿を求めることの無益さについて：31-43 偈

そのまま[人として] 長い[寿命の] 境遇を求めても、寿命や時が[永遠に] 留まることは理にかなわない。[余命は] 昼夜、常に減少し、減少はすれども増加することはないのだから、我々[も、長寿を誇る] 神[さえも] 死ぬという事実は明らかである。昼に大地を見下ろしてみると、日陰に降った雨さえも[やがて] 霧散してしまう[とわかる]。夜に天を見上げてみると、月や星[が満ち欠けし] 移り変わる[のがわかる]。昼夜は入れ替りつつ、[すべてがやがては] 霧散するのである¹⁷。四季は巡るもので、滞ることはない。年月、日時は[移り変わって] 留まり[続ける] ことはない。それを考慮すればすべては無常である[とわかる]。

(VI) 死期について考える必要性について：44-71 偈

¹⁶この例話は、難値難遇を説明する際に仏典にしばしば引用される盲亀浮木の比喻であろう。人に生まれることは難しく、仏法に値うことはさらに難しい。その難しさを、無量劫の寿命を持つ一匹の盲亀（あるいは一眼の亀）が、百年に一度、海上に頭を出した際に、大海を漂う浮木に偶然に首をつっこむほどの難しさであると例えたものである（森 1987, pp.337-338）。

¹⁷36-40 偈は、形あるもので不変なものなどないことを述べる例。

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

人の一生も長くは続かず、僅か〔な期間〕である。若い時は一瞬で、すべては夏の花のように一時は良くとも、長くは続かない¹⁸。生の果てには死が訪れ、集まった（＝出会った）果てには別れが訪れる。100歳を全うする者であっても夜は眠るのだから、100〔年の〕半分は眠りの支配下にある。そして、〔眠りの間は〕記憶はないのだから、死んでいるのと同じであり、〔生きている期間は〕残り50〔年〕があるに過ぎない。さらに、〔酒に〕酔って日中に眠ったり苦しみや煩悩などに苛まれ¹⁹、〔結局は〕その50〔年の〕半分は尽きてしまうので、結果として〔実質的な寿命は〕25〔年〕に〔しか〕ならない。よく記憶に残るのはそれ（＝25年）だけしかない。50〔年〕を全うしないとは誰が思おうか。100〔年〕を全うする人は10万人に一人もいない。今生で、人間として生まれた時に、自身は原初どこからやって来て、遂にはどこへ行ってしまうのか〔を考えるべきである〕。〔すべては〕無常であって、〔自身が〕無くなってしまう時が確実にやってくるならば、どうして自身の心を〔他事で〕紛らせていられようか〔いや、いられない〕。まさに今日〔という日に〕、死ぬことはない、と平穩にしていることは理にかなっていない、と考えるのがふさわしい。

(VII) 死期の助けについて：72-86 偈

死が訪れ、他の世界へ赴くに際して、〔この世に〕ともに生まれたこの身体すらも失ってしまい、助けとして役に立たないとすれば、両親、兄弟、親類や友人、故郷、財産などが助けとしては役に立たないことは言うまでもない。善業のみが助けとなるのである。生まれるのも、はじめは一人で生まれ、死ぬのも、また同じく一人で死ぬ。大きな権力や財産を持つ地位を得ても、それが死期に助けになることはない。〔権力や財産は〕古い衣服と同様に後に残る〔だけである〕。死期の助けとなるのは、善悪〔の行為の結果〕だけである。

(VIII) 悪業をなす者たちについて：87-126 偈

¹⁸ rI myI thogs: rIng myI thogs の誤りと解釈し、45 偈の rIng por myI thog と同じ内容を指すと考えた。

¹⁹ bskal: ITJ 316 では bskald となっているので、動詞と捉えるべきであろう。実際に敦煌出土の契約文書中には、動詞としての用例が見られる (Takeuchi 1995, pp.275-276, pp.151-152)。

phyi shi brgya' la rje blas gyis bskalde ma mchis par gyur na (Pt. 1297_4)、mdo rtsang gis bskal par gyur na' (ITJ 857B). “Phyi shi (the employee) should be called for an official duty and become absent, / [If he] is made to perform the service of an envoy (mdo-rtasang).”

これらの例では、公務に「駆り出される (be called for)」、「使役される (be made to perform)」が「bskal」の訳語に当たるが、どちらも望まない事態に従事させられるといった意味を含むので、ここでは「苛まれる」と訳した。

どこから[来て、]どこへ行こうとも、[過去の行為の影響は]影のようについてくる。無知の陰りで自身が曇り、来世を見通せなかった、と[後から言い訳をするようなことにならないように]、目先の欲望[に駆られて]罪を犯すな。他人の徳と罪は自分自身には関係ない。自身の行為[の影響が結果として]現れるに過ぎない。蒙昧な有情たちは、無常の法を恒常であると[誤って捉え]、安寧ではない境遇を安寧だと捉える。不浄な身体を清浄だと[誤]解し、四つの倒錯した間違い²⁰によって惑わされて、行為の目的として、罪を犯す。三界[に]生死[する]五趣[の境遇]では、自身の行なった[悪]業の毒によって[身を]滅ぼすのである。そのような教えを理解し、現世で教えを聴聞して実践する[時間がある]間に、至上の目的である甘露の業(=善業)をなせ。善業をしっかりと監視せよ。最高の仏、神と人、畜生、餓鬼、地獄[の境遇のうちで]どこを[選ぶかは]自分次第なのだから、どうして自身に害をなす[ような悪業]を行おうか[、いや行わない]。毒と甘露のどちらを選ぶかは、見渡せば明白ではないか。愚か者や子供の知恵しかない者たちは、目先の欲望によって惑わされ、行為の目的として罪を犯す。[死を]自分のこととして捉えないので、彼方(=死後)の煩惱の苦しみを実感しない。人間として生まれていながら、思考は餓鬼や畜生と似たようなものである。罪業を犯しながら善趣の境遇にどうして生まれることができようか[、いやできない]。例えば、蕎麦や豆の実の種から²¹大麦の実ができないように、愚か者の心には善い[行為]に見えても[それによって良い結果は得られず]、魔物の縄に捕らえられ、三悪趣へと連れて行かれた後で後悔しても無駄である。

(IX) 死後の助けとしての仏教について：127-139 偈

²⁰四つの倒錯した間違いとは、凡夫による4つの道理に背く見解、すなわち四顛倒を指すと考えられる。ここでは、無常を恒常と考える、安寧ではない心を安寧と考える、不浄を清浄と考えるという「無常」・「苦」・「不浄」に関する3つの顛倒が述べられており、4番目の「無我(無我を有我と捉える)」の記述が漏れている。

²¹bra sran: bra bo (蕎麦)とsran ma (豆)を指すと考えた。

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』

(西田・今枝・熊谷)

どんなに権力があり親族が多くとも、死〔期〕の助けとしては一つも役に立たない。死に際しては〔この世での〕優劣は〔関係〕ない。寿命が尽きる時には、英雄も怯えるのと同じである。至上の善法〔たる仏教〕の他には何も利益とならないのだから、身命を惜しまず尊い善法〔たる仏教〕の教えの目的を達成せよ。無益な行為に励むことなく自身に役立つことを、自ら実践せよ。いかなる行為によって輪廻するのか、生死のなくなる因とは何なのか、知恵と知性によって正しく理解せよ。

(X) 善き師（善知識）の必要性について：140-153 偈

全ての教えがどんなものであるか知りたければ、善き師（善知識）を探せ。あらゆる善を教えてください、善き師は父のごときものである。全ての悪から守ってください、善き師は母のごときものである。正しい道を示してください、善き師は道案内のごときものである。あらゆる善を生み出してください、善き師は夏のようなものである。煩惱の沼から〔救い〕出してください、善き師は英雄のごときものである。それ故に、善き師から尊い正法を聴け。

(XI) 正法の必要性について：154-159 偈

煩惱から皆を癒してください、正法は薬のごときものである。無知の暗闇を晴らしてください、正法は燈のごときものである。生死（輪廻）の苦しみを取り除いてください、正法は甘露のごときものである。

(XII) 仏教の教えを実践することについて：160-167 偈

人として生を受け、〔仏教の〕教えと出会った今生で、仏法の道を成し遂げなかったならば、後には（＝来世では）人間として生まれることは難しい。〔仏教の〕教えを聴けることは、それ（＝人間として生まれること）よりも稀である。輪廻の沼に沈むことなく、知恵という太陽によって障害を追い払え。戒律という衣で身を包み、至上の仏となるように。

(XIII) 表題：168 偈

輪廻形態説示、完。

5. Pelliot tibétain 24 【翻字】²²

(I) 表題

1 (r24-1) \$ // (flower shape) // 'khor ba'I tshul bstan pa //

(II) 輪廻とは

2 myI rtag 'khor ba'I khams 'dI na //
 3 (r24-2) mtha' yas 'gro ba gnas pa kun //
 4 glo bur 'phral la rang skyes zhIng /
 5 tshe dang (r24-3) dus 'dIr zad pa myIn //
 6 thog ma'I dus mtha' myed pa nas //
 7 sems kyI rang bzhIn (r24-4) ye yod de //
 8 cI ltar gru la (interline<) brten (>interline) bcas nas /
 9 (interline<) pha rol gnas [su] 'gro ba ltar (>interline)
 10 lus nI sems kyI gru yIn te //
 11 yun rIngs (r24-5) dus nas 'dron por 'ongs //

(III) 輪廻の原因について

12 sngun cad sdod pa myed (interline<) pa (>interline) ru //
 13 las dang nyon mongs (r25-1) dug cen gyIs //
 14 'khor ba'I btson ra khams sum na //
 15 khrI mon sdug bsngal gnas (r25-2) rnams su //
 16 nyam thag skyes shI kha brIm pa //
 17 de bzhIn rmongs pa'I rnam shes (r25-3) 'dI //
 18 rgyun chad myed par myI 'gyur te //
 19 dkar nag bdag gyI las gyIs su //
 20 (r25-4) mthon man dman skyId sdug gnas su 'gro //
 21 de ltar skye shI'i (interline<) gnas (>interline) rnams su //
 22 (r25-5) grangs myed phung po blangs pa nI //
 23 sha dang rus pa rI rab tsam //
 24 khrag dang chu ser (r26-1) rgya mtsho snyed //

²²チベット語テキストの翻字規則及び使用する校訂記号は Imaeda *et al.* 2007, xxxii-xxxiii に従った。なお、古チベット語文献中の綴りに関しては、有声音と無声音、有気音と無気音の交替や添前字・添後字の交替・脱落などによって古典チベット語とは異なる綴りが散見される。古典語の正字綴りが容易に想像できる場合は、煩雑さを避けて正字綴りを一々記さず原文のままとした。また、50 偈以降は翻訳に利用した P.t. 24 以外に異本が存在するが、それらのテキストとの異同についても脚注への記載は最小限にとどめておく。

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

(IV) 人間に生まれることの難しさについて

- 25 'on kyang myI lus thob pa'r dka' //
26 yul gyI dbus su skye ba (r26-2) dkon //
27 rgya mtsho cher g.yengs g.ya' (interline<) shIng (>interline) gI //
28 bu gar ru sbal 'grIn²³ chud 'dra //
29 (r26-3) da ltar myI lus thob (interline<) pa (>interline) yang //
30 sngon cad bsod nams byas pa'I yon //

(V) 長寿を求めることの無益さについて

- 31 de bzhIn (r26-4) yun du gnas 'dod kyang //
32 tshe dus sdod par myI rung te //
33 nyIn mtshan rtag (r26-5) du god gyur la //
34 snon ba gud nas myI 'ongs bas //
35 bdag lha 'chI bar mngon (r27-1) sum snang //
36 nyIn zhIng sa la mar bltas na //
37 grIb so chu 'bab yengs la 'das //
38 (r27-2) mtshan zhIng gnam la yar bltas na //
39 zla ba skar tshod gI na yol //
40 nyIn mtshan (r27-3) rje ba yengs la 'das //
41 dus bzhI 'khor ba sdod pa myed //
42 lo zla tshe dus shol²⁴ (r27-4) myI 'gyur //
43 de las brtags na / kun myI rtag //

(VI) 死期について考える必要性について

- 44 myI cig skyas pa'I tshe dus (r27-5) kyang //
45 rIng por myI thog de'u re myed //
46 gzhon nu tshe yang skad cIg ste //
47 dbyar (r28-1) gyI men tog cI bzhIn du //
48 skad cIg bzang yang rI²⁵ myI thogs //
49 skye ba 'I mtha' (r28-2) nI 'chI bar 'gyur //
50 'du ba'I mtha' nI 'bral bar 'ong //

²³grIn: mgrIn

²⁴shol: bshol

²⁵rI: rIng

- 51 skyes bu lo brgya' (r28-3) thub pa pa yang //
- 52 mtshan gyI dus na nyal bas na //
- 53 brgya' phyed gnyId kyI dbang du (r28-4) song //
- 54 de yang dran myed shI dang 'dra //
- 55 lhag ma lnga bcu yod du zad //
- 56 de yang (r28-5) ra ro nyIn nyal dang //
- 57 sdug bsngal nyon mongs rnams kyIs bskal²⁶ //
- 58 lnga bcu phyed (r29-1) kyang der zad nas //
- 59 phyI nas²⁷ nyI shu lnga ru zad //
- 60 legs par dran ba de las myed //
- 61 (r29-2) lnga bcu myI thub cI shIg snyam //
- 62 brgya thub 'bum la gcIg myI 'byung //
- 63 da ltar (r29-3) myI lus thob pa'I tshe //
- 64 bdag nI thog ma ga las 'ongs /
- 65 tha ma gang du 'gro bar (r29-4) 'gyur //
- 66 myI rtag myed par 'gyur ba'I dus //
- 67 gdon myi za bar 'ong 'gyur (r29-5) na //
- 68 bdag gI yid nI cI phyir g.yengs²⁸ //
- 69 dI ring kho nar²⁹ myI 'chI zhes //
- 70 (v2-1) bde bar 'dug pa'I³⁰ myi rigs par //
- 71 de ltar bsam du bdag la 'os //

(VII) 死期の助けについて

- 72 (v2-2) 'chI bar 'gyur (interline<) ba'i (>interline) dus byung zhIng //
- 73 'jig rten gzhan du 'gro ba na //
- 74 lhan cIg (v2-3) skyes pa'I lus 'dI yang //
- 75 bor te grogs la myI phan na //
- 76 pha ma phu nu gnyen (v2-4) sdug dang //
- 77 mdza' bshes yul sa long spyod rnams //

²⁶bskal: bskald (ITJ 316)

²⁷nas: na (ITJ 316)

²⁸yid nI cI phyir g.yengs: yId 'dI jI phyir yengs (ITJ 316)

²⁹nar: na

³⁰pa'I: par (ITJ 316)

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

- 78 grogs su myI phan (v2-5) cI zhIg smos //
79 dge ba 'ba' shig³¹ grogs su 'gyur //
80 skye yang thog ma gcIg (v3-1) pu skye //
81 'chI yang de bzhIn gcIg pu 'chI //
82 btsan 'phyug³² che ba'I sa thob kyang //
83 (v3-2) de tshe grogs su (interline<) 'gyur (>interline) myI srid //
84 gos mying bzhIn du phyI na lus //
85 de'i tshe na grogs (v3-3) 'gyur ba //
86 legs nyes 'ba' shIg³³ grogs su zad³⁴ //

(VIII) 悪業をなす者たちについて

- 87 gang nas gang du (v3-4) 'gro ba'I //
88 grIb ma bzhIn du rjes su 'brang //
89 gtI mug bsgrIbs pas (v3-5) bdag bsgrIbs te //
90 tshe dus phyI ma ma mthong zhes //
91 'phral gyI 'dod dgar (v4-1) sdIg ma byed //
92 gzhan gyI dge sdIg bdag la myIn //
93 bdag gIs gang byas (v4-2) 'ong du zad //
94 rmongs pa'I sems can de dag nI //
95 myI rtag chos la rtag (v4-3) snyams sems³⁵ //
96 myI bde nyams la bde ru 'dzIn //
97 myI gtsang lus la (interline<) gtsang (>interline) snyam (v4-4) ste //
98 phyIn cI log <gI> pa bzhI bsIad³⁶ nas //
99 las kyI don du sdIg pa byed /³⁷
100 (v4-5) 'kham ssum skye shI rgyud lnga ru //
101 bdag gIs byas pa'I dug gIs (v5-1) brlag //
102 de 'dre (interline<) 'I³⁸ (>interline) chos la blos rtogs la //
103 da ltar chos thos spyod khom (v5-2) tshe //

³¹ba' shig: 'ba' zhig

³²'phyug: phyug (ITJ 316)

³³ba' shig: 'ba' zhig

³⁴legs nyes 'ba' shIg grogs su zad: legs nyes gnyis shig 'ong du zad (ITJ 316)

³⁵snyams sems: snyams byed (ITJ 316)

³⁶bsIad: bsIus (ITJ 316)

³⁷ITJ 316 ではこの 1 偈が脱落している。

- 104 don mchog bdud rtsI las su byos //
 105 dge spyod myel tse dam du gyIs //
 106 (v5-3) bla myed sangs rgyas lha dang myI //
 107 byol song³⁹ yI dags dmyal ba dag //
 108 (v5-4) gang bdam bdag la dbang yod na //
 109 cI phyir bdag la gnod pa byed //
 110 (v5-5) drug⁴⁰ dang bdud rtsI gang bdam ba' //
 111 bltas na gsal bar myI mngon nam //
 112 (v6-1) blun po byIs ba'I⁴¹ blo can dag //
 113 'phral gyI 'dod pas bsIus (interline<) nas (>interline) su //
 114 las gyI (v6-2) don du sdIg pa byed //
 115 bdag gI nyams dang myI sbyor zhIng //
 116 pha rol nyon (v6-3) mongs sdug myI tshor //
 117 myI 'i lus su gnas mod kyI //
 118 bsam ba yI dags byol (v6-4) song 'dra //
 119 sdIg pa'I las kyIs spyod (interline<) pa (>interline) las //
 120 mtho rIs gnas su ga la skye //
 121 (v6-5) dper na bra (interline<) sran sa (>interline) bon las //
 122 nas gyI 'bras bur myI 'gyur bzhIn //
 123 blun po'I (v7-1) sems la (interline<) blan (>interline) snyam⁴² ste //
 124 bdud kyI zhags (interline<) pa⁴³ (>interline) zIn nas su //
 125 ngan song gsum du⁴⁴ khrId (v7-2) 'og du //
 126 de nas 'gyod pas 'phan ba myed //

(IX) 死期の助けとしての仏教について

- 127 cI ltar dbang che gnyen mang (v7-3) yang //
 128 'chI ba'I ra mda'r⁴⁵ gcIg myI phan //

³⁸dre'I: dra'i (ITJ 316)

³⁹byol song: byol tshong (ITJ 316)

⁴⁰drug: dug (ITJ 316)

⁴¹byIs ba'I: bus ba'i (ITJ 316)

⁴²blan snyam: bla snyem ste (ITJ 316)

⁴³pa: pas (ITJ 316)

⁴⁴gsum du: gnas su (ITJ 316)

⁴⁵ra mda'r: ram mdam (ITJ 316)

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

- 129 shI ba'I gral du che chung myed /
130 (v7-4) tshe zad dus su dpa' sdar 'dra //
131 dge ba'I chos mchog ma gtogs par //
132 (v7-5) gang yang don du myI 'gyur bas //
133 mgo lus srog la ma 'phangs par //
134 (v8-1) rIn cen dge ba'I chos don sgrubs //
135 don myed las la ma brtson bar //
136 (v8-2) bdag la phan (interline<) ba (>interline) bdag gIs byos //
137 las gang gyIs nI 'khor bar 'gyur //
138 (v8-3) skye shI myed pa'I rgyu gang 'yIn //
139 shes rab blo yas⁴⁶ legs par rtogs //

(X) 善き師（善知識）の必要性について

- 140 (v8-4) chos kun cI 'dra shes 'dod na //
141 dge ba'I bshes nyen⁴⁷ btsa<n>l bar gyIs //
142 (v8-5) legs pa thams cad ston pa'I phyir //
143 dge ba'I bshes nyen pha dang 'dra //
144 (v9-1) nyes pa kun la skyob pa'I phyir //
145 dge ba'I bshes gnyen ma dang 'dra //
146 yang (v9-2) dag lam nI ston pa'I phyir //
147 dge ba'I bshes nyen lam mkhan 'dra //
148 legs (v9-3) pa thams cad skyed phyIr⁴⁸ //
149 dge ba'I bshes nyen dbyar dang 'dra //
150 (v9-4) nyon mongs 'dam las⁴⁹ 'byIn pa'I phyir //
151 dge [*ba'i] bshes nyen dpa' bo 'dra //
152 (v9-5) de bas dge ba'I bshes nyen las //
153 dam <la> chos rIn cen mnyan par byos⁵⁰ //

(XI) 正法の必要性について

- 154 (v10-1) nyon mongs nas kun gso ba'I phyir //

⁴⁶yas: yIn (ITJ 316)

⁴⁷bshes nyen: bshes gnyen

⁴⁸skyed phyIr: bskyed pa'I phyIr (ITJ 316)

⁴⁹las: nas (ITJ 316)

⁵⁰mnyan par byos: mnan bar gyls (ITJ 316)

- 155 dam pa'I chos nI sman dang 'dra /
 156 ma (v10-2) rIg mun nag sel pa'I phyir //
 157 dam pa'I chos nI sgron ma 'dra //
 158 skye shI (v10-3) sdug bsngal sel pa'I phyir //
 159 dam pa'I chos nI bdud rtsI 'dra //

(XII) 仏教の教えを実践することについて

- 160 myIr skyes (v10-4) chos dang phrad pa'I tshe //
 161 'dI tshe chos lam ma bsgrubs na //
 162 phyI nas myI (v10-5) lus rnyhed par dka' //
 163 chos thos pa yang de bas dkon //
 164 'khor ba'I (v11-1) 'dam du ma 'byIng bar //
 165 shes rab nyI mas bsgrIbs (interline<) pa (>interline) spongs⁵¹ //
 166 tshul khrIms (v11-2) rgyan gyIs chas nas su⁵² //
 167 bla myed sangs rgyas grub par gyIs // // //

(XIII) 表題

- 168 (v11-3) // // (flower shape) // 'khor ba'I tshul bstan pa rdzogs'ho //

参考文献

- Imaeda, Yoshiro *et al.* (2007) *Tibetan Documents from Dunhuang*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Macdonald, Ariane (1971) “Une lecture des Pelliot tibétain 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290, essai sur la formation et l’emploi des mythes politiques dans la religion royale de Sroñ-bcan sgam-po.” In Macdonald, A. (ed.), *Études tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*. Paris: Librairie d’Amérique et d’Orient Adrien Maisonneuve, pp.190-391.
- Takeuchi, Tsuguhito (1995) *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo: Daizo Shuppan.
- 今枝由郎 (2006) 『敦煌出土チベット文「生死法物語」の研究』 東京: 大東出版社.

⁵¹spongs: sbyongs (ITJ 316)

⁵²chas nas su: bcas na su (ITJ 316)

敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』
(西田・今枝・熊谷)

- 西田愛・今枝由郎・熊谷誠慈(2019)「古代チベット人の死後の世界観と葬送儀礼の
仏教化——敦煌出土『生死法物語』『置換』『神国道説示』三部作の研究——」
『神戸外大論叢』第70巻第1号, pp.87-130.
- 森章司(編)(1987)『仏教比喻例話辞典』東京：東京堂出版.

2018 年度日仏東洋学会シンポジウム「日仏東洋学を振り返る——ユベール・デュルト先生を追悼しつつ——」

2018 年度の日仏東洋学会総会後に、下記の通り公開シンポジウムを開催した。当会からは、興膳宏会員、中谷英明会員、彌永信美会員、藤原貞朗会員が講演を行い、牧野元紀会員、ダヴァン・ディディエ会員、熊谷誠慈会員がコメンテーターを務めた。また、高橋稔会員が著書出版報告講演を行った。

日時：2019 年 3 月 30 日 (土) 14:00～17:30 (13:30 開場)

場所：京都大学百周年時計台記念館 2 階 国際交流ホール I
(京都市左京区吉田本町)

タイムスケジュール

13:30～14:00 開場・受付

14:00～14:05 日仏東洋学会長挨拶

中谷英明 (東京外国語大学名誉教授、龍谷大学客員研究員)

14:05～14:10 イントロ・講師紹介

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣寄付研究部門長)

14:10～14:15 「ユベール・デュルト先生を偲ぶ」

彌永信美 (日仏東洋学会代表幹事)

14:15～14:30 テーマ①中国学 「フランスシノロジーと私」

興膳宏 (京都大学名誉教授、日本学士院会員)

14:30～14:45 テーマ②インド学 「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」

中谷英明

14:45～15:00 テーマ③インドシナ学 「フランスのインドシナ研究と日本」

藤原貞朗 (茨城大学人文学部 教授)

15:00～15:15 テーマ④日本学 「日仏日本学・仏教学と私の歩み」

彌永信美

15:15～15:35 休憩・質問用紙回収

15:35～16:35 総合討論・質疑応答

興膳宏、中谷英明、彌永信美、藤原貞朗、熊谷誠慈、牧野元紀（昭和女子大学人間文化学部 准教授／東洋文庫 文庫長特別補佐）、ダヴァン・ディディエ（国文学研究資料館 准教授）

16:35～16:55 著書出版記念報告講演「語り物と言語：中国の語り物を中心に」

高橋稔（山形大学教育学部 元教授）

16:55～17:00 総括 熊谷誠慈

共催：日仏東洋学会、京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門

講演録①中国学

フランスシノロジーと私

興膳宏

京都大学名誉教授、日本学士院会員

ご紹介いただきました興膳でございます。私個人のことを申し上げる前に、私と関係の深い京都大学の東洋学者、もっと限定すれば中国学者ですが、それとフランスシノロジーとの関わりについて、最初に少しお話を致したいと思います。

と申しますのは、京都大学の草創期以来の東洋学とフランスのシノロジーとは非常に関わりが深く、そのことを申し上げることによって、日本の学会と、フランスシノロジーとの関わりの大きな部分をお話することになると言っても、さして誤りではなからうかと思うからです。

代表的な東洋学者の先生がたを列伝風に紹介しながら話を進めますと、まず狩野直喜先生（号は君山）は、京都大学が総合大学になる前に、後の京都大学文学部の前身である京都帝国大学の京都文科大学に、いわゆるシナ学、すなわち中国思想史、中国文学の講座が初めて開かれたのですが、その初代の教授に就任されました。狩野先生は中国哲学史（当時の名称は支那哲学史）と中国文学（当時の名称は支那文学）の両方の講座の教授を兼ねておられました。

20世紀初頭の東洋学における最大のトピックと言いますと、何と言っても、「敦煌文書」の発見ということですね。それがイギリスのオーレル・スタイン、続いてフランスのポール・ペリオによって発見されました。そして、その存在が広く紹介されて、世界的に知られるようになりました。

そのペリオが「敦煌写本」を入手したということを1908年に初めて知って、早速、狩野先生は東洋史学の内藤湖南先生などと一緒にそれを日本の学会に紹介されました。ご自身が中国に渡って、実際にそれを見て、その貴重さを確認した上で、日本の学会に紹介されました。いわば敦煌学の基礎を築かれた方であります。

敦煌学の研究は、その後も京都大学の東洋学の長い伝統となって今日に至っており

講演録「フランスシノロジーと私」

(興膳宏)

まして、例えば、資料にお名前を挙げました神田喜一郎先生は、東洋史学のご出身で、戦前は台北帝大の教授を務められ、戦後は大阪市立大学教授、さらにその後に京都国立博物館の館長になられました。京博は長く、戦中に京都市の所有だった時期があるのですけれども、終戦後に再び国に移管されて、その初代の館長を務められました。敦煌学の方面に関する著書としては、『敦煌学五十年』という書を著しておられます。

それに続く敦煌学者としては藤枝晃先生、より新しい世代の方としては、高田時雄さんなどが、現在敦煌学研究の第一線で活躍されている学者であります。

狩野先生に続いてフランスシノロジーと関係の深かった方に、小島祐馬先生があります。小島先生は中国哲学史のご専攻ですが、1925年から2年半にわたってフランスに留学しておられます。フランスでは、デュルケーム学派の流れをくむ、アンリ・マスペロとか、マルセル・グラネなどのシノログから社会思想史的方法論を学ばれました。その成果が小島先生の学問の一つの大きな特徴を成しています。もちろん、「敦煌文献」にも造詣が深い方でありました。

それに続く世代では、東洋史学の宮崎市定先生、私が実際に面識があるのはその宮崎先生以後になるんですけれども、宮崎先生は1934年から2年余りの間、法務省の在外研究員として、フランスに留学されました。京都大学教授になられてからは、1960年から1年間、パリ大学客員教授を務めておられます。1978年にはフランス学士院からスタニスラス・ジュリアン賞を贈られています。

さらに私の直接の師匠である、中国文学の吉川幸次郎先生もフランスシノロジーと深い関係を持っておられました。吉川先生は留学はしておられませんが、世界的に中国研究において著名な欧米各国の学者と親交のあった方でありまして、フランスでは、特にポール・ドミエヴィル先生との親交が深かった。1969年にはフランス学士院からスタニスラス・ジュリアン賞を贈られています。

より新しい世代では、人文科学研究所の川勝義雄先生、東洋史学の研究者ですが、ことに中国中世史学の研究で優れた業績を上げておられます。川勝先生はドミエヴィル先生の要請によりまして、2度にわたって高等研究院、École Pratique des Hautes Étudesで講義を行なっておられます。訳書としては、アンリ・マスペロの『道教』があり、これはいまでも平凡社の「東洋文庫」に収められております。他にも、余り知られていないかも知れませんが、東洋史学の島田虔次先生は隠れたフランスシノロジー通でした。

そういう先生がたが京都大学におられまして、私は宮崎先生以後の方々とは直接に面識があり、いろいろお教えをいただいてもいます。ただ、私自身がどうしてフラン

スシノロジーとの関わりができたかということになると、実はそうした先生がたの影響が原因になっていたわけではありません。だから、以上申し上げたことは、正直に申せば、全部後づけの知識なんですね。

そこで私自身の話に入りますと、私が京都大学に入学した動機は、中国文学をやろうと思ったからではないのです。私は当時フランス文学に憧れておりまして、京都大学に入学したのです。入学したからには、もう絶対にフランス文学を専攻するんだと決め込んでおりました。当時のフランス文学者としては、文学部に伊吹武彦、教養部に生島遼一、人文科学研究所に桑原武夫といった有名なスター学者がおられました。そういう先生がたに何となく憧れていたわけです。

だから、フランス語はとにかく一懸命勉強したんですけども、もし自分に能力があるならば、研究者になりたいと思っておりました。しかし、大学に入ってしばらく考えているうちに、人間は何ごとにつけ相性というものがあるようなんですけれども、フランス文学と自分とは、本当に相性がいいのかということがだんだん疑問になってきました。読者として、フランスの小説や詩歌を読むのは面白いけれども、研究となると、自分は本当にそれに向いているのかということが疑問になってきました。

そうこうするうちに、吉川幸次郎先生のご著書を読んだり、講演を聞いたりして、中国文学により強く引き付けられるものがありました。折から、私が大学1回生のころですけれども、『中国詩人選集』という、李白や杜甫などの代表的な中国の詩人を新しい感覚で紹介する新書版のシリーズが、岩波書店から出始めました。それらを読んでいて、非常に深くその世界に引きこまれました。だから、私は途中で志が変わって、フランス文学志望から中国文学に転向してしまったわけなんです。

だけど、研究者になるという志は持ち続けまして、大学院の入学試験は外国語を二つ選択しないとイケない制度になっていましたが、その一つにフランス語を選択しました。

自慢話をするわけではないんですが、およそそれまで試験というものを受けた中で、そのときのフランス語の試験は、自分で振り返っても最高によくできた。野球で言いますと、待ち構えていたど真ん中のコースに絶好球が来たから、ホームランが打てたようなものなんですけれども。それは自分で考えてもよくできました。吉川先生から後で教えていただいたんですが、98点あったそうです。

それで三回生で中文の講座に所属してから、何となく私はフランス語ができるというような評判があったようです。私が書いたフランスシノロジー紹介の幾つかの文章、あるいは翻訳を資料としてそこに上げております。最初に翻訳したのが、マック

講演録「フランスシノロジーと私」
(興膳宏)

ス・カルタンマルク「フランスにおける中国文学研究の現状」(『中国文学報』18)です。カルタンマルク先生は、ドミエヴィル先生のお弟子さんで、中国の道教思想を専門にしておられた方です。当時は高等研究院の教授だったと思います。

おそらく吉川先生からの要請に応じられたものと思いますが、中国文学研究室で出している『中国文学報』に、カルタンマルク先生が寄稿された文章を翻訳してくれと言われまして、えっと驚いたんですが、何しろ修士課程に入ってすぐのころですからね。どうも98点が大変効いていたようで。他にフランス語のできる若い人は誰もいないので、私がやりました。

その後も、大学院を終えるころに、ポール・ドミエヴィル先生が日本にいらっしやいまして、1966年3月だったと思いますが、そのときに、東方学会の主催で「フランスにおける中国文学研究の現状」という講演を3回にわたってなさいました。その翻訳は、フランス語学の大橋保夫先生、この方は私のフランス語の先生ですが、それに川勝先生と私の3人でやることになってしまいました。確か1月ごろに頼まれて、一月ぐらいで訳してくれというので、大いに困ったんですけども、これも代わってやってもらえるような人がいないので、やりました。『東方学』の第34冊に私が訳した部分の翻訳が載っております。

そういうわけで、いろいろとフランスシノロジーとの関係が、私の意思とは関わりなく、何となくできてしまったようなところがあります。カルタンマルクさんの文章を訳したのとはほぼ同じころ、ジャン＝ピエール・ディエニさん、この方は後に高等研究院の教授になられた方ですけども、その方が京都に一年間研修に来られました。

ディエニさんは吉川先生の要請を受けて、中国文学研究室が主催していた中国文学学会という学会で、「詩経とヨーロッパの民謡」という講演をなさいました。これは私が翻訳をしたわけではないのですが、下訳をもとに講演原稿を制作するに際して、ちょっと手伝ってくれという要請があり、ディエニさんが住んでおられた宇治市の木幡の家まで出かけて、一日がかりでそれをやったことがあります。いつの間にか日が暮れて、ディエニ夫人手作りの夕食をごちそうになりました。その講演原稿はやはりのちに『中国文学報』第18冊に掲載されました。

それがご縁となって、ディエニさんとはその後ずっと親しい関係ができ、具体的なことはのちほど改めて報告することとして、私が大学を定年退職するときに、研究室で出していただいた記念論文集にディエニさんに寄稿していただい序文があり、そこに私たちの最初の出会いのことが書かれております。

これはフランス語からの翻訳ではなくて、ディエニさんご自身が日本語で書かれた

文章です。「1962年、私が京都大学の大学院の授業に受け入れていただいたとき、吉川教授は私に学年末に日本語で講義をするよう依頼された。そして、その準備のお手伝いにと、同門の一人を差し向けてくださった。それが興膳宏氏である」。さらに続けて、「私は少々臆した若き学生が宇治の木幡のわが家に来てくださったことをいまでもよく覚えている」と、そういうことが述べられています。

ディエニさんとそれから長い関係ができて、その後、1982年に文部省の在外研究員として海外に行けることになりました。研修先をどこにするかと考えたんですけども、中国は1980年ごろから改革開放路線が始まって、ぼつぼつ研究者の受け入れも始まったころでした。私も学会に招かれて、文革後の中国を久しぶりに訪れました。中国で研修したいという気持ちはもちろんありましたが、フランスシノロジーとそれまで何となく消極的に、私の意思にかかわらず、関わってきたということを振り返ると、一度フランスに自分で出掛けて、フランスのシノログの方々と直接交わってみたいという思いが強くなり、ディエニさんをお願いして、高等研究院の訪問学者という資格で受け入れていただきました。大学の仕事から解放され、パリでは何の義務もなく研修に専念できましたので、今から顧みてもきわめて有意義な経験でした。

その後、1986年から1987年にかけて、ディエニさんに招かれて、高等研究院の客員教授として一年間講義を致しました。講義題目は、*Théories littéraires chinoises de l'âge médiéval*、「中国中世における文学理論」ということにしました。ディエニさんの門下で、私と同じく中国中世文学を専攻する旧知のフランソワ・マルタンさんがパリ南郊のセッソンという町に住んでいて、私は彼の家に下宿させてもらった上に、彼にフランス語の講義原稿を点検修正していただくという便宜まで与えてもらいました。おかげで、二十二回に及ぶ講義を何とか無事に果たすことができました。

フランスで行なった講義としては、この後、1996年の11月から12月にかけて、コレージュ・ド・フランスに招請されて、*La naissance et le développement de la théorie littéraire en Chine — Des Six Dynasties aux Song*、「中国における文学理論の生成と発展——六朝から宋まで」と題する四回連続の講義を行ないました。このときも、マルタンさんの援助を受けることができました。

私が京都大学に在職中のころには、フランスの若い研究者が京大の中文に留学するという交流もありました。いまCNRS（フランス国立科学研究センター）の研究員であるフランソワーズ・ボテロさんは博士後期課程に入学し、高等研究院教授のレニエ・ランセルさんは短期の研究生となって、それぞれ研鑽を積みました。

こうして振り返ってみると、フランスシノロジーとの関わりは、初めは自分の意思

講演録「フランスシノロジーと私」

(興膳宏)

にかかわらず、何となく始まったのですが、1980年代ごろからは、もっと主体的に、私の意思と積極的にかみ合った形で進展してきたといつてよいと思います。

しかし、数年前に私より九歳年長だったディエニさんが亡くなり、後を追うように、私より十歳も年少だったマルタンさんまでが鬼籍に入ってしまった。うたた寂寥の思いを禁じえません。今はただ将来にかけても、わが国の中国研究がフランスシノロジーと密接な交流を保ちつつ発展することを願うばかりです。

Appendix

京都大学の東洋学者とフランスシノロジー

- 狩野直喜 (1868～1949) 中国哲学史・中国文学
1908年2月ポール・ペリオの敦煌古写本入手を知り、いち早く内藤湖南等と共に日本の学界に紹介。敦煌学の基礎を築く。→神田喜一郎、藤枝晃、高田時雄等 (いずれもフランスシノロジーとの縁が深い。)
- 小島祐馬 (1881～1966) 中国哲学史
1925年から二年半にわたりフランス留学。ことにアンリ・マスpero、マルセル・グラネから、社会思想史的方法論を学ぶ。敦煌文献にも造詣が深かった。
- 宮崎市定 (1901～1995) 東洋史学
1934年から二年有余の間、文部省在外研究員としてフランスに留学。1960年から一年間、パリ大学客員教授。1978年、フランス学士院よりスタニスラス・ジュリアン賞を贈られる。
- 吉川幸次郎 (1904～1980) 中国文学
ポール・ドミエヴィル等のフランス東洋学者と親交あり。1969年、フランス学士院よりスタニスラス・ジュリアン賞を贈られる。
- 川勝義雄 (1922～1984) 東洋史学
ポール・ドミエヴィルの要請により、二度にわたって高等研究院 (EPHE) で講義を行なう。訳書にアンリ・マスpero『道教』(1966年、東海大学出版会、後に1978年、「東洋文庫」、平凡社)

(参考文献: 坂出祥伸『東西シノロジー事情』(1994年、東方書店)。江上波夫編『東洋学の系譜』1, 2 (1992年、1994年、大修館書店)。高田時雄編『東洋学の系譜 (欧米篇)』(1996年、大修館書店)。礪波護・藤井譲治編『京大東洋学の百年』 2002年 京都大学学術出版会)

興膳宏によるフランス中国文学研究の翻訳と紹介

- マックス・カルタンマルク「フランスにおける中国文学研究の現状」(訳) (『中国文学報』18、1963、4)
- ポール・ドミエヴィル「フランスにおけるシナ学研究の歴史的展望」(大橋保夫・川勝義雄と共訳、『東方学』33、34 1967、1・1967、6)
- ポール・ドミエヴィル「寿序—感謝と祈念」(訳) (『吉川博士退休記念中国文学論集』1968、3)
- ベネディクト・グリンパス「中国の思想」(訳) (シャトレ哲学史Ⅱ『中世の哲学』、山田晶監訳、1976、9 白水社)
- ジャン＝ピエール・ディエニ「吉川幸次郎」(訳) (『吉川幸次郎』1982、3、筑摩書房)

東洋学関係の講演会・ワークショップ

- フランス・シノロジー体験記（『日仏東洋学会通信』2、1984、6）
ジャン＝ピエール・ディエニ「鳳凰とフェニックス」（訳）（『中国文学報』39、1988、1）
ジャン＝ピエール・ディエニ「清台に登りて以て志を蕩う―曹植を読む」（訳）（『文選』、角川書店、1988、1）
ミシェル・スワミエ「いくつかの敦煌文献にもとづく後期道教の諸相」（訳）（『中国文学報』40、1989、1）
書評：アンドレ・レヴィ『中国古典文学』（『中国文学報』45、1992、10）
「ポール・ドミエヴィル小伝」（『しにか』63、1995、3、大修館書店）
フランソワ・ジュリアン『無味礼讃』（小関武史と共訳、1997年9月、平凡社）
ギィ・ガニョン氏を哭す（『日仏東洋学会通信』22、1998、2）
フランソワ・マルタン「近十年のフランスにおける中国文学研究の発展」上下（訳）（『中国文学報』57・58、1998、10・1999、4）
イヴ・エルヴェット氏を悼む（『東方学』98、1999、7）

興膳宏によるフランスでの講義

- La théorie de la littérature dans la Chine médiévale. (École Pratique des Hautes Études, 1986-1987)
（その一部は Le Fu sur les lettres de Lu Ji（陸機の「文賦」）と題して De Dunhuang au Japon: études chinoises et bouddhiques offertes à Michel Soymié（Librairie Droz 1996）及び『中国文学理論の展開』（『中国文学理論研究集成』2）（2008、3 清文堂）に掲載。）
La naissance et le développement de la théorie littéraire en Chine. (Collège de France, 1996)（後に修訂の上、『京都大学文学部研究紀要』38に掲載。1999、3。また増補の上、日本語版を『中国文学理論の展開』（『中国文学理論研究集成』2）（2008、3 清文堂）に収録）

講演録②インド学・チベット学

インド・チベット古典学と日仏東洋学会

中谷英明

龍谷大学客員研究員、東京外国語大学名誉教授

本稿は、インド学・チベット学研究者を中心に東洋学研究者の日仏交流史を素描し、あわせて将来の東洋学の在り方について若干の考察を述べる¹。フランスにおける東洋学、わけてもインド・チベット古典学の成立・展開、その間の日仏東洋学会の設立・再建を含む日仏研究者の交流、フランスにおける「東洋学」という枠組み解消に関連する新しい東洋学の在り方、などに触れる。元来、短時間に話すための覚書に過ぎず、網羅的記述ではないことをお許し願いたい。当日配布した4枚のハンドアウト（「話題」と「資料」）はわずかに修正し、本稿末尾に付した。

1. Collège de France における東洋学の拡大

人文主義の教育を受けたフランソワ1世は、スコラ学中心のソルボンヌの外に、教会の権威から解放された人間中心の新学術を養成するため、1530年にコレージュ・ド・フランスの前身「王立教授団」を創設した。

この人文主義の精神が今も生きていることを知ったのは、1984年にストラスブール大学のインド学主任の職に就いた折である。それは同大学からコレージュ・ド・フランスに入ったジェラルド・フスマン教授の後任であったが、その折のフスマン氏の言葉が忘れ難い。「コレージュ・ド・フランスに入ることになって苦しい。確立した理論を解説するソルボンヌと違って、コレージュ・ド・フランスでは未確立の新説を述べないといけないから。」これは今も院長が宣言するとおりである²。ここでコ

¹本稿は、平成30年度日仏東洋学会総会シンポジウム「日仏東洋学を振り返る」における小生の話を、熊谷誠慈幹事が文字起こしして下さった原稿に手を入れたものである。本稿を作らせて下さった熊谷幹事のご配慮に深く感謝申し上げる。また岩尾一史幹事の綿密周到な編集にも感謝申し上げる。なお、当日時間の都合で話せなかった話題も補い、元稿の「ですます体」も「である体」に改めた。

²“Depuis le XVII^e siècle, le Collège de France répond à une double vocation: être à la fois le lieu de la recherche

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

レージュ・ド・フランスの講座を先ず取り上げるのは、この経緯からして、それらがそれぞれの時代のフランスにおける新しい学術の興隆をよく反映すると考えられるからである。

コレージュ・ド・フランスのサイト (<https://journals.openedition.org/annuaire-cdf/126>) から東洋学関係講座創設の記述を抽出したものが資料 (1) である。これを要約すれば下記表 1 のようになる。

表 1. Collège de France における東洋学の拡大

- 1 期) 地中海 (1530～)：ヘブライ語、ギリシア語、数学、ラテン語 (1534)、アラビア語 (1538)
- 2 期) 中東 (1772)：トルコ語、ペルシア語、シリア語
- 3 期) インド・中国 (1814～)：サンスクリット語 (de Chézy)、中国語 (Abel-Rémusat)、印欧 語比較言語学 (Bréal, 1866)、宗教学 (Albert Réville, 1880-1906)
- 4 期) インド・中国周辺 (1911～)：中央アジア (Pelliot)、東南アジア (Finot, 1920)、チベット (Stein, 1966)、日本 (Frank, 1979)、イラン (Kellens, 1993)

コレージュ・ド・フランスにおける東洋学の拡大は、上記の 4 期に分けられる。

第 1 期は、1530 年の設立から 18 世紀後半まで。設立時にはヘブライ語が 3 人、ギリシャ語が 2 人、数学が 1 人という 6 人の教授団であったが、4 年後にはラテン語、8 年後にはアラビア語が加わり、この期には人文主義者が再発見した地中海世界の古典文化が念頭にあったことが明確である。アラビア語を担当した Arnoul de L'isle は医者であって、当時の医者はなおイスラムの大哲学者アビセンナ (980-1037) の医学を学んでいたため、アラビア語を講じ得たのである。人文主義を基盤とするイタリア・ルネサンスは、イタリアでは 16 世紀初めには下火になる一方、そのころからアルプスを越えて、フランスを中心とする周辺の国々に広がった。その波を受けるようにして、フランソワ 1 世がコレージュ・ド・フランスの基礎を築いたことがわかる。

第 2 期は 1772 年、コレージュ・ド・フランスが一新された年に始まる。この期にトルコ語、シリア語、ペルシア語といった、地中海奥の中東の言語が開講された。

la plus audacieuse et celui de son enseignement. Voué à la recherche fondamentale, le Collège de France possède cette caractéristique singulière: il enseigne « le savoir en train de se constituer dans tous les domaines des lettres, des sciences ou des arts », en partenariat avec le CNRS, l'INSERM et plusieurs autres grandes institutions.” ‘Une Maison unique au monde’ par Pr Thomas Römer, administrateur du Collège de France (depuis 2019) et professeur de la chaire Milieux bibliques (depuis 2008).

15 世紀、オスマン帝国の勃興に東進の道を断たれて海に向かわせられたかのようにして始まった大航海時代は、やがて植民地主義の進展と共に異文化への関心を惹起し、啓蒙主義的政治批評を主眼とするとは言え、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』(1721)、ヴォルテールの『マホメット』(1741)などの文芸作品を生むに至っていた。18 世紀半ば以降の英国との一連の植民地抗争に破れて初期の植民地の多くと海上覇権を失ったフランスは、フランソワ 1 世時代の同盟以来のオスマン帝国との親縁を利し、政治的・経済的利害を動機として、中東地域の言語の講座をこの期に設けたと思われる³。

第 3 期には、中東地域諸言語の講座開設に遅れること 40 余年にして、サンスクリット語と中国語の講座が創設される。1763 年のパリ条約によってイギリスがインドと北米植民地における覇権を確立するのに対して、劣勢に立ったフランスは、インドにおいてポンディシェリーなどの商業都市における権益を細々と保ちつつ、ベトナムの阮福暎を支援し、1802 年、初めてベトナム全域を統一する国家を成立させている。このフランスのインドシナ拠点の両側に位置する二大文明圏の言語、サンスクリット語と中国語の講座が 1814 年、同時に設けられたのは、これら 2 語が伝える深遠茫洋たる古典文化の認識が、ようやく本格化し始めたことを示すであろう。

インド、コルカタの判事であったウィリアム・ジョーンズが 1786 年に同地のアジア協会で講演し、サンスクリットがギリシア、ラテンと並ぶ印欧古典語であり、「ギリシア語より完全で、ラテン語より豊穡であり、しかも両語より優雅に洗練されている」(more perfect than the Greek, more copious than the Latin, and more exquisitely refined than either) と述べ、爾来サンスクリットは印欧祖語の一つ、しかもその最高級のものという評価を享受することになる。印欧語比較言語学の開設は 80 年後の 1866 年となったが、後にソシュールーメイエーバンヴニストと続く輝かしい比較言語学の系譜は、先に、アヴェスター研究の先駆者であり、古代ペルシア語、中期インド語研究者でもあったユジェヌ・ビュルヌフ(在職 1832-1852)が、ラテン語・ギリシア語の大家であった父ジャン・ルイの影響下に準備していた。

第 4 期は第 3 期の始まりからおよそ 1 世紀後に始まる。この期の講座開設はインドと中国という二大文明圏の周辺地域を対象とした。19 世紀から 20 世紀にかけて、英国とロシアが中央アジアの覇権をめぐる政治的戦争を繰り広げた「グレートゲーム」の渦中⁴において、1911 年に中央アジア学(Pelliot)が、また 1899 年のフランスに

³Cf. 山口昭彦「フランスにおけるイラン研究とクルド研究」、『オリエント』40-1(1997): 172-182. なお、1795 年にはさらに主として口語を教育する東洋言語特別学校(École spéciale des langues orientales、ラングゾ(INALCO)の前身)が設立され、トルコ語、アラビア語、ペルシア語の講座が設けられた。

⁴大谷光瑞が中央アジア等に派遣した 3 次に渡る大谷探検隊(1902-1914)も、これを背景に考えるべき

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

よるラオスの保護国化によって完成の域に近づいた仏領インドシナ連邦を主対象として、1920年に東南アジア学 (Finot) が設置されている。その後、第二次世界大戦後には、チベット学、日本学、イラン学が創設された。

以上、コレージュ・ド・フランスにおける東洋学関係の新講座開設の跡を辿れば、16世紀から20世紀に至る5世紀の間に、地中海周辺から、中東、インドと中国、さらにインド・中国の周辺地域へと順次対象地域が広げられて行った様子が見て取れる。しかもそれは、当初の人文主義を継承する古典学を核としていた。

なお、資料 (2) によって、学士院 (Académie des inscriptions et belles-lettres) のインド学を見れば、コレージュ・ド・フランスと同時か、あるいはやや遅れつつ研究者が入っていることが判る。

2. 日仏東洋学研究者の交流：日本人のフランス滞在・フランス人の日本滞在

最初期から20世紀半ばまでの仏教学・インド学を中心とする日本人研究者のフランス滞在と、日仏東洋学会の設立と再建に関する事項を記したのが、資料 (3) である。

フランスに滞在した日本人研究者の最も早い例は、西本願寺が1882年に派遣した藤島了穂と藤枝通澤という二人の僧侶のようである。藤島了穂は7年間の滞仏中に、義浄の『南海寄帰内法伝』の一部の仏訳を *Journal asiatique* に寄せた (1888年)。また南条文雄が編纂した日本仏教12宗派を概説する12編の和文論文の英訳本に若干の改訂を加え、仏語で公刊している (*Le Bouddhisme Japonais*, 1889年)⁵。この書の達意のフランス語には驚かされるが、それは序文にあるごとく、EPHEのサンスクリット語講師になりたての25、6歳頃のシルヴァン・レヴィの助けによるもののようである。レヴィは終生熱心に異国から来た留学生の世話をした人であったが、その片鱗を既にここに見ることができる。

20世紀に入り、仏典研究が梵語・パーリ語原本、漢訳、チベット語訳等の諸本の精緻な対照比較による文献学的手法を伴って、仏語圏において急速に進展した。その中心的役割を果たしたレヴィは、1926年来日し、2年前から渋谷栄一と駐日フランス

であろう。世界情勢に明るい光瑞は、謂わば「仏教による文明の再構築」という遙かな目標を見すえていた。Cf. 入澤崇「大谷光瑞師のめざしたこと」三谷真澄編『大谷光瑞の構想と居住空間』法蔵館、2020年。

⁵Ryauon Fujishima, 'Deux chapitres extraits des Mémoires d'I-Tsing sur son voyage dans l'Inde', 1888, *Journal asiatique*, 8 ser. t. 12, p. 411-439. Ryauon Fujishima, *Le Bouddhisme Japonais : doctrines et histoire des douze grandes sectes bouddhiques du Japon*, Paris, 1889. Bun'yu Nanjo, *A short history of the twelve Japanese Buddhist sects. Translated from the original Japanese*, Tokyo, 1886.

大使ポール・クロードルによって設立が準備されていた日仏会館の初代館長として2年間滞日した。山口益はその古典文献学の手法をレヴィから学び、それは後に長尾雅人らの京都の仏教学者が中心となって継承・発展させた。

パリでレヴィからサンスクリットを学び、1926年、ひと足先に東京に着いていたポール・ドミエヴィルは、レヴィの到着まで日仏会館館長代理を務め、そのまま4年間で日本を過ごした。この間ドミエヴィルは、レヴィの肝いりで西本願寺21世門主大谷光尊と三井家の和田久左衛門の財政支援により⁶、レヴィと高楠順次郎⁷を主監として刊行されることになったフランス語による仏教大辞典『法宝義林』(1929～2003)の編集長を務めた。

この頃(1929年)高楠順次郎はスタニスラス・ジュリアン賞を受けている。同賞は戦後、羽田亨(1952)、吉川幸次郎(1969)、藤枝晃(1972)、宮崎市定(1978)らが次々と受けた。

戦後のインド学・仏教学会において、フランスとの絆を最も強く意識したのは大地原豊であろう。1952年パリに留学して20世紀を代表するインド学者ルイ・ルヌー(パリ大学、学士院会員)と出会い、ヴェーダ聖典と並んでインド文化の双璧を成すとされるパーニニ文法を習って、ルヌーから *génie* と評された(福井文雅の証言と大地原の生涯については、『通信』13号1991年の追悼文参照)⁸。なお、後に、大地原の強い影響下、周辺の6人の学生がパリ大学でPh.D.を取得している。

資料(4)にはフランスに滞在した日本人、日本に滞在したフランス人の東洋学者を、その滞在年と共に一覧している⁹。

3. 日仏東洋学会の設立と再建

資料(3)の末尾には、日仏東洋学会の設立と再建に関する事項を簡単に記している。ルヌーは日仏会館館長として2年間(1954-56)滞日した。『法宝義林』がレヴィによって創刊されたごとく、ルヌーが日仏会館館長であった時期に、ルヌーの *Avant Propos* を添えて *Bibliographie de l'Orientalisme japonais* が創刊されている。日仏東洋

⁶第1巻の *Avertissement* 参照。第2分冊以降は 'Fondation Ôtani et Wada' と表紙に記す。PDF 参照：
<https://archive.org/details/hbgirindictionna01031vuoft/page/n9/mode/2up>

⁷高楠順次郎は龍谷大学の前身、普通教校の出身であり、『法宝義林』は西本願寺との繋がりが深い。

⁸大地原が生涯にルヌーから受け取った手紙170通の原本は Institut de civilisation indienne (Paris) に保管され、コピーは日仏東洋学会にある。

⁹主として『通信』の中の記事に依っている。遺漏、誤りはご指摘頂ければ有難い。

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

学会は、この目録出版事業の支援を目的として設立された（1955 年）¹⁰。

その後、同目録の編纂が 1962 年に停止され、第 2 代会長辻直四郎の逝去（1979 年）とともに殆ど休眠状態となっていた日仏東洋学会は、1983 年に、福井文雅、大地原豊によって再建された¹¹。それは 1976 年以来、原則として 3 年ごとに日・仏交互に¹²開催されていた日仏コロックへの参加を主たる目的としていた。実際、本会は、福井、大地原、羽田明、秋山光和、御牧克己、中谷英明、山田利明らが中心となって 1985、1988、1991 の 3 回にわたってこれに参加した。1988 年、大地原が羽田明とともに京都で開いた第 5 回日仏コロック『中央アジア諸言語文書』ではフランスから 8 名、日本から 13 名が 5 日間にわたって京都国際会館と龍谷大学で講演と討議を行い、その大半をフランス語で行うという、日本開催の東洋学の会議としては異例のものとなった（論文集の *Avertissement* 参照）¹³。

しかしながら 1991 年、第 6 回会議のためにパリに赴いた日本側参加者は、フランス側代表フスマンから、フランスにおける「東洋学」という枠組みの解消という衝撃的な報告を受けた。日本側代表の秋山光和は、日本側はあくまで東洋学部門という枠組みでの参加であると念を押し、その後日本で提出した報告書にはそのように記したが、いかんせん日仏コロックの「東洋学部門」はこれが最後となった。

4. 未来の人文学の可能性 —— 「東洋学の解体」を超えて

(1) 東洋学解体の報せ

フランスにおける「東洋学の解体」という大事件に遭遇して、羽田正はいち早く本誌『通信』（16 号、1993 年）に「フランス東洋学近況」という一文を寄せ、CNRS の担当者からの聞き取りを報じている。それによれば、1992 年に CNRS が断行した研究体制変革は、次の理由によると言う。要約すれば次のようである。

¹⁰ 日仏東洋学会ホームページ (<http://www.classics.jp/sofjeo/gakkai.html>)、「日仏東洋学会の沿革」参照。

¹¹ 福井、大地原両名が榎一雄に再建を提案し、榎から会長就任の許諾を得た経緯は、日仏東洋学会『通信』第 11 号、7 頁参照。 http://www.classics.jp/sofjeo/tsushin/vol11_ocr.pdf また彌永昌吉（元日仏会館副理事長、彌永信美本会前代表幹事の父君）は日仏会館にあって一貫して日仏東洋学会のために尽力を惜しなかった。なお、本稿の範囲からは逸脱するが、彌永昌吉の東大数学科の先輩、末綱怨一は晩年仏教を研究し、『華嚴経の世界』（春秋社、1957）や「大悲と無分別智」（『印度學佛教學研究』1967）等の優れた著書・論文を発表した。彌永は影響を受けたのであろうか。

¹² ただし、第 2 回、第 3 回は連続して日本で開催された。日仏コロックに関しては日仏会館刊行の『日仏文化』 <http://www.nichifutsu-kaikan.jp/> に報告が掲載されている。

¹³ *Documents et archives provenant de l'Asie centrale : actes du Colloque franco-japonais organisé par l'Association franco-japonaise des études orientales affiliée à la Maison franco-japonaise de Tokyo et l'Université de Paris III*, Kyoto, 1990.

「東洋という広大な地域の言語、宗教、歴史、地理、文学、哲学等を包含する東洋学という枠組みは、もはや遂行が困難であると同時に時代の要請に応えられないから、これを撤廃する。今後は、「古代・中世の世界」、「経済と社会」、「人間と環境」等といったテーマごとに一領域とし、そこに種々の地域の研究者が共に所属する体制を取る。」

フランスにおける東洋学という枠組み解消は、我が日仏東洋学会にとっては重要事であるから、ここで少しばかりその経緯と東洋学の将来の在り方を考えてみたい。

(2) 東洋学の矜持と学際的共同研究

羽田報告の中では、今後、東洋学者はテーマごとに諸文明地域の研究者が共同研究する体制を取ると言われている。

異領域の研究者による学際的研究自体は、第2次世界大戦後、米国において行動科学研究、地域研究において重視され、人類学、社会学、心理学等の研究者が参加した。またガルベンキャン委員会報告書(1996)で、イマニュエル・ウォーラースタインは、社会科学をより開いたものにするために、研究者は学際的共同研究に参加するだけでなく、すべからず主専攻と、それとは全く異なる副専攻の2専攻を持つべきであるとさえ主張している¹⁴。

かつての東洋学は文献学が中核を成していた。いわば文献学が東洋学の矜持であった。ウォーラースタインによれば、19世紀から20世紀半ばまで、人文学は、一方では西洋の過去を対象とする歴史学と、現代を対象とする3学(社会学、政治学、経済学)があり、他方では西洋以外の世界を対象とする2学(未開社会を対象とする人類学乃至は民族学と、文明社会を対象とする東洋学)があって、二分されていた。東洋学は自らの対象とする諸文明が素晴らしく、かつ複雑な構造を持つがゆえに、それを理解するには原典理解の手法、すなわち古典文献学が中心とならねばならないと主張し、社会科学と呼ばれることを拒否した、とウォーラースタインは述べる¹⁵。

この意味での学際的研究という観点からすれば、歴史学、社会学、政治学、経済学に分科していた欧米地域対象の4学に対して、それらのすべてを包含する東洋学はむ

¹⁴次注 15 参照。

¹⁵Cf. Presentation delivered by Immanuel Wallerstein at the SSRC on October 24, 1995, to mark the publication of *Open the Social Sciences: A Report of the Gulbenkian Commission on the Restructuring of the Social Sciences* (Stanford University Press, 1996). <https://items.ssrc.org/from-our-archives/open-the-social-sciences/>

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

しろ先行していたと言えるかも知れない。実際東洋学は、古典文献に残る医学、数学、天文学などの自然科学さえ包含していたのである。

ただし東洋学に欠けていたことがある。それはインド、中国、日本等異なる文明地域を横断する東洋学研究者間の連携研究であった。かつて筆者が組織した特定領域研究「古典学の再構築」(1997-2003)¹⁶はこの欠を幾分とも補おうとするものであった。上記の羽田報告では、今後まさにそのような研究を行うことが述べられている。しかしながら、これは上記特定領域研究が行ったごとく、東洋学内部で行うことも可能であって、東洋学という枠組み解消の理由としては弱いと思われる。

(3) 人文学の使命と CNRS における人文・社会科学の組織体制

CNRS における人文・社会科学の研究体制の基本的枠組みは、改変後 30 年近くを経た現在もほぼ変わっていないようである。今日、文系、理系合わせて 3 万 2 千人の研究者を擁する CNRS は 10 部門から成り、そのうち文系中心の部門は人文・社会科学部門 Institut des sciences humaines et sociales (INSHS) ただ一つである。そこでは、「言語や知識の創造者、経済・社会・政治的営為の主体としての人間」、言い換えれば人文、社会、両科学が対象とする人間に関して、次の 4 課題に関する研究を行うとしている。1) 歴史の中の文化と社会 *cultures et sociétés dans l'histoire*、2) 人間・社会・環境 *hommes, sociétés et environnement*、3) 行為・認識・意思伝達 *comportement, cognition et communication*、4) 現代世界 *mondes contemporains*。

「いかに生きるべきか」という人間学的問いにいかに答えるか。人文学の使命はこの探求に尽きるであろう。かつて筆者はこれに挑むべく共同研究を組織したことがある。東京外大 AA 研と Maison des Sciences de l'Homme (MSH, Paris) との共同研究「総合人間学」(*Science généralisée de l'homme*)、2004-2011 である¹⁷。それは直前に終了した特定領域研究「古典学の再構築」において報告された、宝の山とも言うべき諸古典の知を現代に生かす方法を見つけたいという、それなりにさし迫った動機によるものであった。

この人間学的問いに答えるためには、何を知っておかなければならないか。その収集すべき情報を、「総合人間学」では 4 項に分けた。時間軸に沿って挙げるならば、先

¹⁶特定領域研究 (A)「古典学の再構築」(1997-2003)。資料 (5) 参照。<http://www.classics.jp/RCS/index.html>

¹⁷資料 (5) 3) 参照。概要は、中谷英明「新しい人文知のあり方をめぐって——Maison des sciences de l'homme との「総合人間学」共同研究 (2005-2011)」『通信』34-36 号、平成 25 年 pp.24-28 に報告。http://www.classics.jp/sofjeo/tsushin/vol34_36_ocr.pdf

ず、1)「生物としての人間」：地球世界と、そこに現れたヒトを知ること。すなわち生物の歴史とその中でのヒトの位置の確認(脳科学、人類学、動物行動学…)。次には、2)「伝統文化」：有史以来の文明が残したもの(比較神話学、歴史学、古典学、哲学、宗教学…)。そして、3)「現代世界」：現代世界の諸地域の政治・経済・社会(社会学、経済学、政治学…)。さらには、4)「先端科学」：未来世界がいかなる状況になるかを予測させる先端科学の成果(AI、生命科学、脳科学…)、である。

新しい人文学を作るための基礎学、あるいは統合学としての「総合人間学」は、以上の4項目を研究項目としたのであった。今回、この発表を準備するため CNRS の組織体制を調べ、上記の人文・社会科学全体の4課題を知り、それらが「総合人間学」の4項目と、多少の境界のズレはあるものの、全体としてよく対応することに驚いた。すなわち CNRS の人文学改組は、科学技術によって超高速で変容する現代世界に人文学を適応させ、本来の「いかに生きるべきか」という人間学的、哲学的問いの上に人文学を再構築するための体制再編であったと理解される。

(4) 世界の脱呪術化と再呪術化

「いかに生きるべきか」という人間学的解明の課題を基盤とし、その上にすべての研究を有機的に構築した学へと人文学を再編するには、何を考慮すべきであろうか。

まず第1に、東洋学に関しては、中核とも言うべき文献学の維持・強化が必要であろう。「インド(古典)学は言語習得に長期間を要する息の長い学問で…」というのが学士院・パリ大学の中期インド語学者コレット・カヤの常套の前口上であったが、現在の CNRS のごとく、一地域を専門とする東洋学者が研究テーマごとにバラバラになった時、語学の徹底した習得と資料の扱い方を含む古典文献学の伝統を保つ工夫が必要であろう。日本においてもその劣勢化が懸念される。対面による師資相承の永続的教育システムの確立は、多様な現実の「フィールド」に対処してゆくべき古典文献学にとって喫緊の課題である。

第2には、より根本的に重要なこととして、「人文学は人間学的課題の解明を目的とする」という意識の明確化がある。テキストのデジタル化の進展は、種々の伝本・訳本等の「可及的悉皆的情報収集」を容易にし、文献学は著しく効率化した反面、情報収集とその処理だけに終始する文献学を生みだす危険を孕むようになった。それも成果の一部ではあるが、人文学が細片化した知に留まることは許されない。得られた新知見が世界の認識と人間の生き方にいかなる意味があるか、それを常に意識しつつ研究を遂行し、すべての知見を再評価する必要があるだろう。

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

マックス・ウェーバーは、1918年の講演で、啓蒙主義と科学によって宗教と迷信が取り払われた世界の状況を「脱呪術化」Disenchantment (Entzauberung) と称し、世界は呪術から解放されたものの、豊かさを失ったと述べ、社会や政治の大義が見失われ、個人生活における快樂追求を最上善とする風潮を生じた、と嘆いている。迷信に立ち戻ることは論外であるが、かと言って価値観や道德の形成を科学に任せることもできない立ち往生状態、それが脱魔術化状況なのである。

しかし幸い東洋においては、西洋では科学によって隅に押しやられた宗教伝統が命脈を保っている。実際、東洋文献学は諸古典の厳密な合理的読解だけでなく、神秘思想や信仰の理解にも努めてきた。合理的理解を究極まで推し進めつつ、人間学的課題を、生きた人々の心中に分け入って理解する、実践的文献学が東洋学には今後ますます求められるであろう¹⁸。

人文学において一つの規範が立てられることがある。曰く、対象記述に当たって研究者は可能な限り自分の個人的あるいは社会的バイアスを離れて客観的記述に徹すべきである、と。しかし実際にはこれは努力目標に過ぎず、いかなる研究者も自分の生い立った自然環境や社会的、文化的文脈から完全に離れて中立的、客観的にはなり得ない。

それならばむしろその事実を受け入れ、人文学の基本的立場を逆転したほうがよいのではないか。すなわち先ず、研究者自身の視点をより広く、柔軟で、高潔なものとし、その視点から全く異なって見えてくる世界を俯瞰して、新しい人文学を構築することが望ましいのではないか。古代インド文明には、その最初期（前13世紀の『リグ・ヴェーダ』の時代）以来顕著な一つの思想が存在する。それは「繰り返される行為が人格を作る」という考えである。例えば長年の苦行が人に超能力（タパス、苦行力）を賦与するといったものである。これは「修行」と言い替えるならば、仏教だけでなく、広く諸宗教に認められる思考であろう。人文学者自身が先ず自分の心を時間をかけて高めてゆくならば、世界の見え方が変わり、そこに新しい人文学が形成されてゆく。謂わば聖知乃至は徳知によって「再呪術化」Reenchantment (Wieder-zauberung) された世界の認識をめざす人文学である。

あらゆる古典に触れ、あらゆる出自や文化伝統を持つ人々と交わって広い視野を獲得すること、自然に触れ、精神や身体を鍛えること、これらは人の心を変えるであろう。新しい人文学は、このようにして時間をかけて形成された、より高い精神が創出

¹⁸この点を強調すべく、かつて東洋学・アジア研究連絡協議会主催シンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興」において講演した：中谷英明「実践知を基盤とする人文学の展望」、東京大学法文2号館、2014年12月13日。

するものとなるであろう。

(5) ブッタの「自省利他」

いかにしてその「聖知」を獲得するかが、残された課題である。これは古来宗教や哲学等が究極の目標として、多くの思索や実践が試みられてきたところであるが、以下に紹介するブッタの「自省利他」の哲学は、その中でも、次のような優れた点があると考えられる。

ブッタは、ブッタ自身が残したと推定される『スッタニパータ』第4章「八頌品」において、「自省利他」という言葉で要約される生き方こそ、個人と社会の揺るぎない安寧を創る道であると説く。その骨子はおおよそ次のようなものである¹⁹。

「人は自省と利他の実践によって安寧となり、社会の安寧も創られる。自省とは、自分は無自覚の利己心に常に支配されていると自覚し、心理・行為の内省によって利己心払拭に努め続けることである。自省は、実は、利他心の涵養に他ならない。そして利他の行為はすべての人に安寧を与える。ただし、出家者の自省は、家族・財産等の一切を放棄した無所有の生活（遊行）において精密な心理分析によって利己心払拭に努め続けること、利他は、遊行における自省によって高潔なところを自ら具現しつつ、在家の人々を先導することである。これに対し、在家者の利他は、所有する家族、財産、共同体、権力等によって人々の安寧を創造すること、自省は出家のところに学んでところと行為を内省するとともに、自分の創造物が人々の真の安寧に資するか、また自分の所有が適正かを反省することである。」

これがブッタの「自省利他」の概要である。「自省」と「利他」のような「自己の修養」と「他者への慈しみ」の一对を重視する例は、人類の思想史上珍しいことではない。例えばカントは「人にとって目的であり、かつ義務であるものはただ二つ。「自己の完成」と「他人の幸福」である。」(Die Metaphysik der Sitten, 1797) と述べる。大乘仏教では、自利と利他、智慧と慈悲、般若と方便、往相と還相、根本智と後得智、大智と大悲（鈴木大拙）などの併称がほぼそれに当たるであろう。

¹⁹現存する仏典の中で約 200 詩から成る「八頌品」のみがブッタ自身の手になるであろうと推定されることについては、拙論を参照願いたい：中谷英明『ブッタの認識論、あるいはこころの可能性について——「闍諍篇」中核部 (862-874) 訳注』「伝統思想シリーズ」龍谷大学現代インド研究センター、平成 26 年。ネット上に PDF 版があり、中谷のホームページからもダウンロードできる：<http://classics.jp/HN/>

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

ではこれらに比して、ブッダの「自省利他」の際立った特長は何か。第一に、「無自覚の利己心の自覚」を出発点とすること、しかも利己心は不断に生じるから、その払拭である「自省」も不断に継続するという点である²⁰。言い換えれば、自分のものの見方は常に自覚しない利己心が作る誤りを含むから不断の刷新が必要である、と自覚して刷新し続ける行為が「自省」である²¹。ここで立ち入る余裕はないが、ブッダは心理分析による「自省」の方法を精密に説いている（注 19 の拙論参照）。

第二に、「自省」が利己心の払拭であるならば、それは人を思いやること、「利他」に他ならないとする点である。こうして他者の安寧に尽くそうと「自省」し続けること、すなわち不断の「自省」によって「利他」の心を作ってゆくプロセスが「自省利他」であり、そこには「悟り」のような一定の到達点は存在しない。利己心の不断の払拭こそが「(利己心の) 消尽 (nibbāna 涅槃)」と呼ばれる理想的生き方なのである。

この「自省利他」に専念する人は、深い安寧を得る。それは脳科学が示す通り、他者への配慮と自己の欲望の自制が、ヒトの最大の特性であり、ヒトの本性に適った行為であるからである²²。「自省利他」の人は謙虚に慎重に他者を思いやるから、世界に恒久平和をもたらすであろう。神や仏などの絶対的存在を信仰しないが、信仰が人々の安寧に資する限りその信仰を尊重し、場合によっては自ら信仰することもあり得るから、「自省利他」はあらゆる宗教の信仰者にも受容可能な原理である。「自省利他」の在家者は、自分が所有するもの（自分の命、家族、財、権力等）を適切に自制すると同時に、それらを他から侵された時には、他者の安寧に資する範囲で適切にそれらを護るであろう。また自立した判断力を備え、付和雷同せず、法に触れなくとも人々に害をなす可能性のあることは避け、集められる限りの情報から判断して他者の安寧のために最上と思われることを為すという、結果責任が取れる行動を為すであろう。ただし、「自省利他」は、人の行為を、例えばピーター・シンガーらの Effective Altruism の如く謂わゆる「理性」によって定量的に評価することはない。それではウェーバー

²⁰親鸞思想の「悪人正機」は、自分の自覚しない利己性の自覚と、利己性を全面的に離れることの不可能性を指摘するから、ブッダの「自省」に極めて近い。

²¹これは「無見解」を標榜することではなく（「無見解であれ」という命題は、その見解自身を持つか持たぬかという自己言及のパラドックスに陥る）、見解の刷新を不断に実行する行為そのものである。親鸞の「つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし」（『末灯鈔』5. 自然法爾のこと）は、阿弥陀仏への信仰が自分の内から湧き上がってくるさまを述べ、そこにおけるはからいの無さ（義なき）は、意図しては（義なきを義としては）あり得ないことを述べて、「自省」に近接する。

²²脳の前頭前野の発達が他の霊長類に見られない人類のみの特性であり、前頭前野の働きが「思いやりと自己抑制」にあることについては、次の論文参照： Tsutomu Nakada, 'Brain science of the mind', in *In search of a generalized science of humanity* edited by Hideaki Nakatani, *Social Science Information*, vol. 50 (1), page(s): 25-38, Maison des Sciences de l'Homme, Paris, March 3, 2011. <https://journals.sagepub.com/toc/ssic/50/1>

の言う Disenchantment の世界に逆戻りすることになる。人の営為はすべて、他者との関係性から生じるまごころ（「他者に尽くそうという純粋な気持ち」『大辞林』）に基づいてなされ、まごころによって評価されるべきである。

「自省利他」はこうして主流派経済学が措定するアイデンティティである「自己利益を追求する個人」(Self-interested Individual) を、「自省利他的個人」(Introspective Altruistic Individual) に置き換えることによって、新しい民主主義、自由主義、宗教、学術、資本主義、企業統治等の世界システムの根本原理を提供し、よりよい未来社会を思慮深くデザインし得ると考えられる。

*

最後に、「自省利他」の心を持った人文学者が創る人文学の可能性について付言する。1873年にパリで第1回会議が開催され、134年目に当たる2007年にアンカラで第38回が開かれて以来立ち消えになっている International Congress of Asian and North African Studies (ICANAS) という東洋学者の大会議がある²³。筆者は東洋学・アジア研究連絡協議会幹事会の委嘱を受けて、この会議を運営する国際オリент・アジア研究連合 (International Union for Oriental and Asian Studies, IUOAS) の事務局長 Jean-Louis Bacqué-Grammont 氏に2015年にパリで面会して、現況を尋ねた。同氏は「分野ごとの国際会議が活発となり、それら諸分野全体を統合する ICANAS のような大会議の存在意義が薄れたと一般に感じられている。目下どの国からも改革案は出されていない。日本が改革案を提示するならそれを審議するための準備会を招集する。」と述べた²⁴。それを持ち帰って上記の幹事会に諮ったが、その後進展なく今日に至っている。

ICANAS に、「自省利他」的人間性の上に立つ新しい人文学の可能性を討議する場を設けることはできないであろうか。それは地球上のすべての個人と共同体に安寧をもたらす可能性を探求することになると考えられるのであるが・・・。

²³ 国際東洋学会議 (Congrès internationaux des orientalistes) は1873年、20カ国から千人以上の東洋学者を集めてパリで開催された。この名称は1976年に Congrès inter-national des études sur l'Asie et l'Afrique du Nord (CISHAAN) に、1986年にはさらに International Congress of Asian and North African Studies (ICANAS) へと変えられた。言語、歴史、文学、宗教、哲学、人類学、文化学、環境学、経済学、国際政治等の部門を有し、毎回千人から3千人のアジア・北アフリカ研究者が集う大会議であった。

²⁴ また、Pierre Filliozat Société Asiatique 副会長からは、総合人間学的視点の重要性に強く賛同するという談話とメールを頂いた。

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

配布ハンドアウト

「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」

中谷英明

平成 30 年度日仏東洋学会総会シンポジウム「日仏東洋学を振り返る」
2019 年 3 月 30 日 (土) 京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール I

話題

1. Collège de France における東洋学の拡大 (資料 (1)、(2) 参照)
2. 日仏東洋学研究者の交流：日本人のフランス滞在・フランス人の日本滞在 (資料 (3)、(4) 参照)
 - ・西本願寺が藤島了穩 (1852-1918) をパリに派遣、7 年間 (1882-1889) 滞仏。
 - ・Sylvain Lévi 日本滞在 (1926-1928)
 - ・Paul Demiéville 日本滞在 (1926-30) 『法忘義林』編集長
 - ・Louis Renou (1954-1956 滞日) と大地原豊 (1952-53 滞仏)
 - － La Kāśikā-vṛtti (adhyāya I, pāda 1) ; trad. et comment. par Y. Ojihara et L. Renou, 1960.
 - － Renou から大地原宛ての手紙 170 通は Institut de civilisation indienne (Paris) に保管
3. 日仏東洋学会の設立と再建 (資料 (3)、HP「学会案内」、「広報誌『通信』」)
 - ・設立：1955：石田幹之助 (東洋史)、辻直四郎 (梵語学梵文学)、榎一雄 (東洋史)
 - － *Bibliographie de l'Orientalisme Japonais*, I(1955 前半); II(1955 後半) (1958;1962)
 - ・再建：1983：榎一雄、福井文雅 (中国思想)、大地原豊 (梵語学)、彌永昌吉 (数学)
 - － 日仏コロック (1976～)：④ Paris, 1985: 中国学、⑤ 1988 東京 I. 中国学・京都 II. 「中央アジア諸言語文書」、⑥ Paris, 1991: I. 中国学・II. 「仏教の地域文化への適応」
 - ・“Documents et archives provenant de l'Asie centrale”, Kyoto, 1990 (羽田明・大地原豊)
4. 未来の人文学の可能性 — 「東洋学の解体」を超えて (資料 (5) 参照)
 - ・1992：CNRS が「東洋学」を解体 (羽田正『通信』16 号)。
 - 人文学の 4 課題：1) 歴史、2) 社会と環境、3) 人間 (行為・認識・意思伝達)、4) 現代世界
 - ・2004-2011：「総合人間学」：AA 研・MSH 共同研究：
 - ① 生物としての人間、② 伝統文化 (宗教・哲学・歴史)、③ 現代世界 (政治・経済・社会)、④ 先端科学 (AI・脳科学・生物学)
 - ・「聖知に基づく人文学」：研究者自身が人間性を高め、そこから研究する人文・社会科学：
 - － ‘Self-interested Individual’ (主流派経済学) から ‘Introspective Altruistic Individual’ へ
 - － 「自省利他」をアイデンティティとし、研究者自ら「自省利他」社会を構想する人文学
 - － 中谷英明「実践知を基盤とする人文学の展望」東洋学・アジア研究連絡協議会主催シンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興」、東京大学法文 2 号館 2014 年 12 月 13 日
 - ・「自省利他」の思想：
 - － 『スッタニパータ』「八頌品」出家：無所有・自省・利他 / 在家：所有・自省・利他
 - － 大乘仏教：「自利・利他」；カント：人生の目的かつ義務は「自己の完成」と「他人の幸福」
 - － ‘Self-interested Individual’ (主流派経済学) から ‘Altruistic Individual’ へ
 - － 「自省利他」をアイデンティティとする社会の構想

- －「自省利他」の人間性を持つ人文学者の養成と、その視点からの新しい人文学の創造

資料

(1) Le Collège de France. Quelques données sur son histoire et son caractère propre

I. Les origines

1. Les lecteurs royaux. – Le Collège de France doit son origine à l'institution des lecteurs royaux par le roi François Ier, en 1530.
4. François Ier, conseillé par le savant humaniste Guillaume Budé, « maître de sa librairie », ne s'attarda pas à la convaincre. Il institua en 1530, en vertu de son autorité souveraine, six lecteurs royaux, deux pour le grec, Pierre DANÈS et Jacques TOUSSAINT ; trois pour l'hébreu, Agathias GUIDACERIUS, François Vatable et Paul PARADIS ; un pour les mathématiques, Oronce FINÉ ; puis, un peu plus tard, en 1534, un autre lecteur, Barthélémy MASSON (LATOMUS), pour l'éloquence latine. Les langues orientales autres que l'hébreu firent leur entrée au Collège avec Guillaume POSTEL (1538-1543), l'arabe en particulier, avec Arnoul DE L'ISLE (1587-1613).
9. En 1772, une décision royale réorganise entièrement la répartition des chaires de manière à intégrer les enseignements novateurs : physique de Newton, turc et persan, syriaque, droit de la nature et des gens, mécanique, littérature française, histoire, histoire naturelle, chimie – à côté des domaines de recherche déjà en place : médecine, anatomie, arabe, philosophie grecque, langue grecque, éloquence latine, poésie latine, droit canon, hébreu, mathématiques.

III. Les chaires du Collège de France depuis le xix^e siècle Langues, histoires et littératures orientales

41. Les domaines de recherche nouveaux entrés dans l'enseignement du Collège au xix^e siècle ont d'abord été ceux de l'Inde et de la Chine, dont l'étude avait été amorcée en Europe par plusieurs orientalistes du Collège au siècle précédent. En 1814, furent créées ensemble les chaires de Sanscrit et de Chinois.
42. La première a été inaugurée par Léonard de Chézy (1814-1832), illustrée par Eugène Burnouf (1832-1852), et reprise après un intervalle de suppléances par Édouard Foucaux (1862-1894), puis Sylvain Lévi (1894-1935) et Jules Bloch (1937-1951). L'enseignement y débordant traditionnellement le domaine du sanscrit, elle a repris en 1951, la dénomination de chaire de Langues et littératures de l'Inde et a eu pour titulaire Jean Filliozat de 1952 à 1978. En 1983 a été créée une chaire d'Histoire du monde indien pour M. Gérard Fussman (1984-2011), et, en 1993, une chaire de Langues et religions indo-iraniennes pour M. Jean Kellens.
43. La seconde, dont l'enseignement s'est, de son côté, constamment étendu à l'ensemble de la sinologie, a été tenue par Jean-Pierre Abel-Rémusat (1814-1932), Stanislas Julien (1832-1873), Léon d'Hervey de Saint-Denys (1874-1892), Édouard Chavannes (1893-1918), Henri Maspero (1921-1945), Paul Demiéville (1946-1964), M. Jacques Gernet (1975-1992) ; depuis 1991 une chaire d'Histoire de la Chine moderne est occupée par M. Pierre-étienne Will et une chaire d'Histoire intellectuelle de la Chine est confiée en 2008 à Mme Anne Cheng.

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

44. étendant le champ des enseignements aux pays d'influence indienne et chinoise et aux civilisations propres à ces pays, trois chaires ont été créées : la première de Langues, histoire et archéologie de l'Asie centrale pour Paul Pelliot (1911-1945), qui devait prendre le titre d'Histoire et civilisations de l'Asie centrale pour Louis Hambis, de 1965 à 1977, et se transformer en chaire de Sociographie de l'Asie du Sud-Est pour Lucien Bernot (1978-1985) ; la deuxième d'Histoire et philologie indochinoises pour Louis Finot (1920-1930), auquel ont succédé Jean Przyluski (1931-1944), puis émile Gaspardone, de 1946 à 1965, et qui a été alors transformée en chaire d'étude du monde chinois : institutions et concepts pour Rolf A. Stein (1966-1981) ; enfin la troisième, sous le titre de Civilisations d'Extrême-Orient, a été occupée par Paul Mus (1946-1969). Une chaire d'étude du Bouddhisme a été créée en 1970 pour André Bareau, qui l'a occupée jusqu'en 1991. En 1979, a été créée une chaire de Civilisation japonaise pour Bernard Frank qui l'a occupée jusqu'en 1996 (1954-56 滞日). Enfin, en 2011, une chaire de Philologie et civilisation japonaise a été créée pour M. Jean-Noël Robert.

Linguistique générale

20. L'enseignement de la *Grammaire comparée* fut inauguré au Collège de France par Michel Bréal (1866-1905), qui eut pour successeurs Antoine Meillet (1906-1936) et émile Benveniste (1937-1972). …*Armand Minard (1906-1998), grammaire comparée Histoire des religions
53. Une chaire d'*Histoire des religions*, créée en 1880, a eu pour titulaires Albert Réville(1880-1906), Jean Réville (1907-1908), Alfred Loisy (1909-1932), Jean Baruzi (1933-1951) et Henri-Charles Puech (1952-1972).

Préhistoire

56. Fut créée, en 1929 une chaire de *Préhistoire*, tenue par l'abbé Henri Breuil (1929-1947), discipline reprise de 1969 à 1982 par André Leroi-Gourhan (1938-1939 滞日)...

(2) Académie des inscriptions et belles-lettres (Indianistes, Tibétologues)

- 1785 Abraham Hyacinthe Anquetil-Duperron 1731-1805 indianiste
1816 Antoine-Léonard Chézy 1773-1832 orientaliste
1832 Eugène Burnouf 1801-1852 linguiste, indianiste
1835 Alexandre Langlois 1788-1854 indianiste
1838 Joseph Héliodore Garcin de Tassy 1794-1878 islamiste, indianiste
1882 Émile Senart 1847-1928 indianiste
1885 Abel Bergaigne 1838-1888 indianiste, sanskritiste
1893 Auguste Barth 1834-1916 indianiste
1928 Alfred Foucher 1865-1952 indianiste
1946 Louis Renou 1896-1966 indianiste (1954-1956 滞日)
1947 Jacques Bacot 1877-1965 tibétologue
1966 Jean Filliozat 1906-1982 indianiste
1980 André Leroi-Gourhan 1911-1986 ethnologue, archéologue, historien (1938-1939 滞日)
1986 Colette Caillat 1921-2007 indianiste
1997 Jean-François Jarrige 1940-2014 archéologue, orientaliste

東洋学関係の講演会・ワークショップ

2000 Pierre-Sylvain Filliozat 1936 indianiste

(3) 日仏の交流（仏教学・インド学）と日仏東洋学会

- 1814 Collège de France: Léonard de Chézy (1814-1832)
1822 Eugène BurnoufがSociété Asiatique 設立
1826 Christian Lassen & Eugène Burnouf, *Essai sur Le Pali*
1844 Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien et le Lotus de la Bonne Loi*
1873 Congrès internationaux des orientalistes, Paris. Léon de Rosny, ethnologue du Japon
1875 Thomas William Rhys Davids, Pali Text Society 設立
1881 Herman Oldenberg, *Buddha · Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*
1897-1910 Friedrich Max Müller, *The Sacred Books of the East* 刊行
1883 南条文雄『南条目録』（1876-1884 滞英）
1882 西本願寺が藤島了穩 (1852-1918, 7 年間滞仏)・藤枝沢通 (1861-1920) をフランス派遣
1888 Ryauon Fujishima, Deux Chapitres extraits des Mémoires d'I-Tsing sur son Voyage dans l'Inde(義浄『南海寄帰内法伝』仏訳; Lévi, Sorbonne 講師)
1889 Ryauon Fujishima, *Le Bouddhisme Japonais*
1896 高楠順次郎、英・独留学 (1890-97) の帰途、仏に滞在
1898 École française d'Extrême-Orient 設立 (Saigon, 1901 Hanoi)
1902-04, 1908-09, 1910-14 大谷探検隊
1908-1911 Sylvain Lévi, *Mahāyāna-Sūtrālamkāra* 『大乘莊嚴經論』
1923-1931 Louis de la Vallée Poussin, *L'Abhidharmakosa de Vasubandhu* 『俱舍論』
1928-1929 do. *Vijñaptimātratāsiddhi. la Siddhi de Hiuan-Tsang* 『成唯識論』
1926-1930 Paul Demiéville 日本滞在
1926-1928 Sylvain Lévi 日本滞在
1929-(2003) *Hobogirin* 『法宝義林』
1927-1929 山口益フランス滞在 (with Lévi, Lamotte) 1929 Prix Stanislas Julien: 高楠順次郎、その後、羽田亨 (1952)、吉川幸次郎 (1969)、藤枝晃 (1972)、宮崎市定 (1978)
1952-1953 大地原豊、その後、その恩恵を受けた学生 6 名がパリ大で PhD を取得
1955 日仏東洋学会設立: 会長石田幹之助、副会長辻直四郎
1955-1962 *Bibliographie de l'Orientalisme japonais*
1983 日仏東洋学会再建: 会長榎一雄、代表幹事福井文雅、関西支部代表大地原豊
1985 第 4 回日仏コロック「道教と日本文化」(パリ)
1988 第 5 回日仏コロック (1) 「中国・日本間の宗教交流史」(伊東) (2) 「中央アジア諸言語文書」(京都)
1991 第 6 回日仏コロック「仏教の各地域文化への適応」(パリ)

(4) 日仏の交流（東洋学）

1) フランス滞在: 小島祐馬 (1926-28)、山口益 (1927-1929)、彌永昌吉 (1931-34)、羽田明 (1936-38, 1964-66)、宮崎市定 (1936-38, 1960)、岡山隆 (1950-54)、加藤周一 (1951-54)、大地原豊 (1952-53, 1965, 1971, 1985)、山口瑞鳳 (1957-64)、福井文雅 (1961-64)、石井米夫 (1962)、川口久雄

講演録「インド・チベット古典学と日仏東洋学会」
(中谷英明)

(1962)、川勝義雄 (1964-65)、彌永信美 (1964-69)、白土わか (1965-67)、滋賀秀三 (1968)、藤枝晃 (1970)、山中一郎 (1970-73, 1989-91)、榎一雄 (1971)、御牧克己 (1972-74)、浜田正美 (1973-75)、石沢良昭 (1974-76)、中谷英明 (1974-78, 1983-86)、岸本良彦 (1975-77)、京戸慈光 (1975-86)、廣川堯敏 (1976-78)、狩野直禎 (1977-78)、八木徹 (1977-80)、坪井善明 (1977-82)、後藤純子 (1979-81)、羽田正 (1980-83)、赤松明彦 (1981-83)、興膳宏 (1982, 1986-87)、高橋稔 (1982)、熊沢精次 (1983-84)、坂出祥伸 (1989)、牧野元紀 (2000-04)、中島隆博 (2009)

2) 日本滞在: Paul Demiéville (1926-30), Sylvain Lévi (1926-1928), André Leroi-Gourhan (1938-39), Louis Renou (1954-56), Bernard Frank (1954-56), Hubert Durt (1960-63, 1965-2018), Jean-Noël Robert (1974-75), Didier Davin (2015-).

(5) 中谷による日仏共同研究

- 1) 1991-94: Association for Pali Text Inputting (APTI): 45 人、総研 (A)・一般 (B)
- 2) 1997-2003: 古典学の再構築: 約 200 人、特定領域研究 (A)・基盤 (B) <http://www.classics.jp/RCS/index.html>
- 3) 2004-2011: 総合人間学: 約 70 人、AA 研・Maison des Sciences de l'Homme (Paris) 共同研究 <http://www.classics.jp/GSH/>

*詳細は中谷英明のホームページ参照: <http://classics.jp/HN/>

講演録③インドシナ学

フランスのインドシナ研究と日本

藤原貞朗

茨城大学人文社会科学部教授

茨城大学の藤原です。よろしくお願いします。さきほどの中谷先生のお話がとても面白くなってきたところで終わられたので、私の発表はなしにして続けて欲しかったと思うぐらいです。まず少し自己紹介をします。本日は大家の先生方がご登壇する中で、私のような若輩者が一人ぼつんと来て、皆さんは誰なのかなと思われているのではないのでしょうか。私は東洋学の専門ではなく、フランス美術を専門に研究しています。そのためにフランス留学したのが 1990 年代の後半で、そのときにフランス極東学院の資料と出合いました。そこからフランス美術の勉強をしながら、極東学院の歴史の研究をするというプロセスを続けてきました。

ちょうどそのころ極東学院は創立 100 年を迎え、それまでは隠していたというわけではないのでしょうか、院長のみが閲覧できる「極秘」資料というものがありまして、それが公開になりました。それをいろいろと見ているうちに日本との関係とか非常に面白い内容が書かれており、それにはまっていきました。

2000 年に留学を終えて、母校の大阪大学へ戻りました。大学にはインド美術の肥塚先生がいらして、極東学院の研究をしてきたのなら、デュルト先生に挨拶してきなさいとおっしゃられ、恐る恐る会いに行った思い出があります。ちょうど大学にはデュルトさんの娘さんも在籍していたことが、なつかしく思い出されます。ですので、今日この場で発表させていただくことができ、個人的にもとてもうれしく思っております。よろしくお願いします。

それでは、始めさせていただきます。テーマはインドシナ学と日本です。私はこれまでインドシナ学と言いますか、アンコール遺跡の歴史を中心に研究をしてきました。あわせて日本とフランスの文化交流も、主として第 2 次世界大戦頃までですが、研究を続けています。

講演録「フランスのインドシナ研究と日本」

(藤原貞朗)

日仏東洋学会という場で発表させていただくにあたり、最初に強調しておきたいのは、日仏の文化交流において、もっとも実りがあったのは、東洋学者たちの交流であるということです。普通、日本とフランスの文化交流と言うと、画家などの芸術家や文学者のことがよく話題に上りますが、それ以上に東洋学者の日仏交流が重要ではなかったかと思います。さらに大胆に言えば、東洋学者たちが日本とフランスの文化交流をけん引してきた、中心であったと、そんなふうにすら思います。だから、これまであまり目立ってはきませんでした、この点はこの学会が強調してしかるべきかと思っています。

それでは、インドシナ学の話をしてゆきましょう。内容的には一昨年にこの学会でのシンポジウムの際に『通信』に書いた論文の繰り返しになります。参考文献に挙げてありますので、そちらの方、ご興味を持たれましたら、お読みください。

そもそも「インドシナ学」という言葉は馴染みがありません。ここで初めて耳にするという方もおられるでしょう。インドシナ学なるものは存在したのか。ここから話を始める必要があります。スライドをご覧ください。松本信廣の『印度支那の民族と文化』という本の序文です。ここにあるように、少なくとも 1942 年、昭和 17 年の時点においては、インドシナ学というコンセプトは確かにありました。内容を少しみますと、「印度支那の文化史を研究する為には支那学と印度学との知識が必要であり、その点に於いて印度支那学は此の東亜の二大文明の学徒が相協力して研究すべき分野であると云える。(…) 今後各方面の学徒が (…) 我国東洋学の一翼として印度支那学建設の大業に邁進せられんが為、多少の機縁となれば幸いである」というようなことが書かれています。

この文章からいくつかのことが分かります。ひとつは当時、インドシナ学は新しい学問であったこと。中国学、インド学、仏教学と比べますと、新しい学問として存在していました。それから、この文章で明らかのように、インドシナ学が、日本の戦争の時代と深い関係があることも分かります。参考資料をご覧ください。先に『通信』に書いた論文にも付したインドシナ研究史です。これを見る限り、太平洋戦争の時代までは、インドシナ学がコンセプトとして日本で強く意識されたことはありません。まずは中国学の延長線上で出てきている安南史、それから、仏教学者の高楠順次郎の書き物に見られるような仏教学。仏教学からの発展としてのこの地域の研究が少しあります。その後、1910 年代以降に盛んになるのが日本人町の研究です。こちらは主として歴史学からの発展として出てきています。

こういう状況は、フランスでもさほど変わりがありません。先ほど中谷先生のお話

でありましたように、フランスがインドシナ地域の研究を始めるのは、1900年頃にフランス極東学院が設立されてからのことです。学院の初代院長はルイ・フィノで、インド学出身でしたが、彼はこんな風に書いています。「極東学院の研究領域は極めて広大で、(…)インドシナ半島のみならず、インドを含む極東全域を研究領域として包含する。(…)インドシナは己自身のみでは説明できない。この地は民族と文明の合流地点であり、各々の源泉に遡らずには決して理解しえない。シャムとビルマなしにラオスを研究しえないし、インドなしにカンボジアは理解できない。また、中国なしにアンナンを、マレーシアなしでチャンパを研究できない。極東はひとつであり、極東全体が研究範囲とならねばならないのである」。

インドシナを理解するにはインドと中国、この二つを理解していないと研究できない。なぜなら、そこは文明の合流地点だからだと言っています。「インドシナ」という名前に暗示されますように、フランスはインドシナをインドと中国の間の場所、すなわち、合流地点ということではしか定義できていませんでした。ですから、ここにやってきた学者はみなインドか中国かの専門家でした。逆に言いますと、中国学者、仏教学者、インド学者、こういう人たちがこの地にやって来ることによって、非常に学際的な環境が生まれる可能性がありました。そこに日本が積極的に関わっていくことになるのです。

詳細な歴史は時間の関係で省略しますが、極東学院が創設された1900年頃はたとえば、言うまでもなく、フランス領インドシナ連邦が成立した時期です。植民地支配の一助として学術機関が設立され、そこでの研究が推進されたのでした。先ほど言いましたように、インドシナはフランスにとって、中国学とインドシナ学が合流し、交流する地点だったのですが、同じように、東洋をフィールドとする日本の学者たちもフランスの研究者たちとの交流を通じて、インドシナを学問の合流地点とみなしてゆきます。当時は、東洋学者でも、大学に勤めた者たちは、みな留学先としてヨーロッパを選びました。フランスにもみな足を運びました。第二次大戦以前の日本では大勢の日本の東洋学者が欧米留学を経験しました。そしてフランスの東洋学者と交流する中で、この時代に特有の東洋学のスタイルを身につけて、互いに切磋琢磨してゆくことになります。

例えば、先ほど紹介した松本信廣は慶應大学の民俗学の助教授として1924年にフランス留学し、ソルボンヌで民俗学の研究をしました。彼はこの留学が機縁となって、帰国後は極東学院のフランス人と交流したり、あるいは1924年にできた日仏会館にやってきたフランスの東洋学者と交流したりして、インドシナ研究へと向かってゆく

講演録「フランスのインドシナ研究と日本」
(藤原貞朗)

ことになります。1933年にはインドシナの極東学院を訪問しています。

一方、フランス人の東洋学者も多数日本にやってきました。ご覧のスライドにざっと挙げました。肩書を見れば、彼らの大半が極東学院と関わりをもっていたことが分かります。日本を研究する学者もハノイの極東学院に配属され、そこから日本にやってくる、というようなこともありました。日本人から見れば、インドシナ、すなわち東南アジアに「極東学院」があるというのは奇異な感じがします。極東とはいえば、中国から、朝鮮半島を経て日本の地域に限定されるように思うのですが、フランスは、インドシナ地域をも「極東」という概念で捉えていたわけです。ですから、インドシナも日本も同じ一つの概念のもとに収められ、そういうなかで、東洋学者たちの日仏交流も活発化したのでした。

最後に少し政治的な話をして終わりたいと思います。フランスのインドシナ学は明らかに植民地学、すなわち政治的な学問でした。一方、日本のインドシナ研究もまた政治的な学問として成立していました。そしてまた政治的な学問として、戦後に解体される運命にありました。

最初に紹介した松本の著作に代表されますように、インドシナ研究の重要な著作は全て1940年以降、すなわち日本軍がベトナムへ進駐を開始してから公刊されています。書誌をご覧ください。この時期には東南アジア地域の研究書が多数出ており、今日に通用する重要な研究がある一方で、たぶんに時局的な研究もあります。典型的な一例として、1943年に出た瀬津正志の『印度支那の原始文明』を挙げましょう。瀬津の仕事は戦時の日本の国策的な方針を示す思想的な歴史書としてよく取り上げられていますが、このインドシナ研究もそうでした。そこにはこんな一節があります。「(インドシナの) 問題の解決はわれわれ日本人の手に委ねられた仕事である。(…) [フランスの学者は] 東南アジアの文化は印度支那から東へ、南へと流れて展開されたものと信じている。(…) [然し] 印度支那は東南アジアの大きい文明の中に含まれる一地方にすぎない。(…) わが国の若い考古学者、民族学者が続々と西南太平洋の原始文化の究明に邁進し、それによって新秩序の政治的建設への材料を提供すると同時に、また先んじて行われた印度支那先史文明を研究し、これに通暁することによって、その目標達成の一日も早からんことを希望する次第である」。日本の軍隊が南方に進出していた時期、瀬津は、日本のインドシナ研究をも鼓舞し、フランスの学者と対峙しようとしたのでした。

もう発表の時間がありませんが、手短に、フランスの碩学ジョルジュ・セデスの『極東におけるインド化された諸国の古代史』に一言だけ触れておかねばなりません。セ

デスの本は戦後に邦訳されて、教科書のように重宝されています。セデスはインド化をキーワードにして、インドシナ地域を説明しました。インド文明が東へ伝播するという流れでインドシナを捉えました。

しかし、この本もある意味で政治的に理解される必要があります。なぜ、セデスが1944年という年にこの本を書いたのかということをよく考えないといけないと思います。いま読むと非常によくできた一般書として読めるのですが、そんな概説書のようなものをなぜ、日本軍が進軍してきた混沌とした時期にあえて書いたのか。瀬津が述べたように南方の文化からインドシナを理解しようとする日本側の主張に対する、ある種のレジスタンスだったのではないかと、私はそんな風に思うわけです。

その後、セデスは、1962年にさらに包括的な『インドシナの人々、歴史と文明』を書いています。こちらは、太平洋戦争が終わるとともにインドシナ戦争が始まり、植民地インドシナが解体されてなくなる、そんな時代に書かれています。つまり、解体されて現実にはひとつではなくなるという時代に、セデスは、インドシナはひとつの文化圏、文明圏であると強調する概説書を書いたのです。おそらくは、インドシナ学というものが植民地主義時代にはあったという記憶として。

以上のように、インドシナ学は、インドシナの終焉とともにその役割を終え、限られた著作のなかにのみ、その記憶がとどめられています。それは、東洋学ないしオリエンタリズムにも当てはまることかもしれません。もはや私たちは、日本でもフランスでも、東洋学、オリエンタリズムをひとつの学問分野として捉えることは少なくなりました。時代に応じて学問の枠組みが解体されてゆきます。しかし、なされた研究は残り、受け継がれ、そして現在があります。枠組みとともに、その学史も忘れることだけは避けねばなりません。ときおり「日仏東洋学を振り返る」必要があると思うしだいです。

舌足らずとなりましたが、これで発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

付記：当日の発表では、以下の拙稿に付した資料を配布いたしました。あわせてご覧いただけますと幸いです。「大戦間および戦時のインドシナ学をめぐる日仏東洋学者の学術交流」、『通信』41号、日仏東洋学会、2018年3月、65-75ページ。

講演録④日本学

日仏日本学・仏教学と私の歩み

彌永信美

日仏東洋学会 代表幹事

ご紹介いただいた彌永と申します。今日は、「日仏日本学・仏教学と私の歩み」という題でお話することになりました。実は、この（2019年）2月16日に、東京の日仏会館で日仏会館／フランス国立日本学研究所と日仏東洋学会の共催で「日本学における日仏学術交流のこれまでとこれからを考える——文学研究・宗教研究をめぐる」というシンポジウムが開催され、そこでもいくらか似たようなお話をしました。そちらにも参加してくださった方には、繰り返しの部分も出てくることをあらかじめお断りしてお許しいただきたいと思います。ぼくは1964年から69年まで、フランスで過ごしました。そんなふうに言うと、皆さまには、そんなに古い時代に、と驚かれる方も多いのではないかと思います。というのは、普通、留学といえば大学を卒業した後に行く方が多いですが、ぼくの場合、16歳から21歳までの五年間で、はじめの三年間は地方の都市（ナンシー）で高校に通い、後の二年間をパリの高等学術院（いわゆるEPHE）に籍を置いたので、とても若かったからです。高等学術院では、第四セクションの歴史・文献学部門でベルナール・フランク先生の日本学の講義に出させていただきました。ぼくが大学教育に近いものに触れたのは、はたちから21歳までのこの二年間だけです。それまでの学校教育では、ずっとひどい劣等生でしたが、このフランク先生の講義は、ぼくにとっては本当に衝撃的でした。講義は週2時間で、一時間は仏教図像学、もう一時間は確か『土佐日記』の講読でした。ぼくがとくに興味をもったのは、仏教図像学の講義で、インドに遡り、中国、日本での変遷をたどるさまざまな図像の象徴や神話的背景など、毎時間が興奮の連続でした。それまで、ぼくはずっとヨーロッパのことばかりに興味をもってきたので、日本のこと、東洋のことをフランス語を通して学ぶことは、とても新鮮な驚きでした。仏教のことも、フランク先生の情熱に触れて、フランス語の本を買って勉強を始めました。これは、今考え

講演録「日仏日本学・仏教学と私の歩み」

(彌永信美)

とてもとてもよい出発点だったと思います。仏教の用語は日本語の日常語に取り込まれたものが多いので、仏教を勉強する場合も、日本語だと日常語の意味に引きずられてしまうことが多いと思いますが、フランス語であれば最初から特殊な意味をもつものとして学ぶことができます。また、フランスの東洋学には、東洋の言語からの翻訳を非常に逐語的に、文字通りに（あるいはことばの原義に即して）訳し、にもかかわらずフランス語として美しく聞こえるように訳す、というある種の伝統があり、フランク先生はそういう伝統をもっとも見事に継承された方だったので、その意味でも（もちろん自分でそれを受け継ぐことはできませんが）とてもよい教育を受けたと思います。このように、日本学の最初の一步、仏教研究の最初の一步をフランク先生から教わったことは、ぼくにとってとても貴重な財産になったと思います。

その後、日本に帰ってから、やはりフランク先生のご紹介で京都のフランス極東学院支部、「法寶義林研究所」で、和漢資料に基づく仏教百科語彙『法寶義林』の項目の一つ書くことになりました。ここでデュルト先生、ザイデル先生、デュケンヌさん、さらにフォルテさん、ミシェル・ストリックマンさんなどと知り合うことができたのも、今に至るまで、ぼくの人生でもっとも感謝することです。学問的には、辞書の項目のアルファベット順でまったくの偶然に過ぎなかったのですが、「大自在天」という項目を書くことになりました。それが、その頃、24歳のころから今まで、ぼくの研究領域を決定することでした。はじめは、漢文もまるで知らなかったのですが、漢文仏典の説話を丸写しにして、それをシャヴァンヌの仏訳と対照しながら意味を理解しようとする、といった原始的な勉強をしていました。相国寺の塔頭、林光院の離れにあった「法寶義林研究所」で一年の半分近くを過ごして、仏教学の基礎の勉強を続け、四年間で受け持った項目を書き上げたのが、最初のいくらかまともな論文になりました。その間、ストリックマンさんやザイデル先生の恩師だったチベット学、中国学のスタン先生が京都を中心に二ヶ月ほど滞在され、あちこちお供をさせていただいたことも、その後の勉強に計り知れない影響を与えました。

これはつい最近、日仏会館でのシンポジウムを準備した時に、フランク先生の「日本学の五十年を振り返る」という1973年のご論文を読んで知ったことですが、フランク先生の恩師だったシャルル・アグノーエル先生が、最初に日本語を学ばれた頃はまともな日本語教育がフランスに存在しておらず、ほとんど独学で学ばれたということです。しかし同時に、アグノーエル先生は、中国学をマルセル・グラネに、比較言語学をアントワーヌ・メイエに、サンスクリットをシルヴァン・レヴィイについて学ばれた、ということで、こうした広い東洋言語と文献学、そして社会学の方法論を当時の

フランスの最高の知性の元で学ばれたことが、現在のフランスの日本学の基礎にあるということが、非常に重要な意味をもっていると思います。同様に、フランク先生ご自身も中国学をスタン先生に、インド学をルヌー先生に、また仏教学をポール・ミュスについて学ばれており、その広い知識の背景が見えてきます。さらに、スタン先生のお話で何度も出てきたのは、グラネの元で勉強したことが大きな意味をもった、ということで、グラネという人がいかに枢要な位置を占めたか、ということがよく分かります。ジョルジュ・デュメジルも、彼の専門であるインド=ヨーロッパ語族の神話体系とは遥かに遠い中国学をグラネに学んだことが、彼の学問形成に大きな意味をもったことは、よく知られています。さらにスタン先生は、コレージュ・ド・フランスの同僚だったレヴィ=ストロースにも強い影響を受けられ、また同じコレージュ・ド・フランスの同僚で詩人のイーヴ・ボンヌフォアという巨大な知性との交流も、先生の学問に深みを与えたと思います。このように、1980年代ころまでのフランスの学者の多くは、自分の狭い専門分野に留まらず、広い学識と視野を持っていたことが、大きな研究を展開する背景にあったと思います。ぼくは一度だけ、アグノーエル先生の講義を聴講する機会がありました。その時、先生は『竹取物語』の講読をはじめられる時で、たとえば「翁」が日本文化でどのような意味をもったか、あるいは「竹」は古代の技術体系でいかに重要だったか、などをお話になられ、そのお話の広がりにはぼくはただ聞きほれていた覚えがあります。

一方、『法寶義林』は、ビュルヌフ以来のフランス仏教学の王道を体現する場であって、そこにはシルヴァン・レヴィ、ポール・ドミエヴィル、エティエンヌ・ラモット、ジャック・メなど、まさに綺羅星のような名前が並んでいます。ぼくがそこで学んだのは、何よりも厳密な文献学の大切さと、仏教を考える場合、どこか一つの文化に留まらず、仏教が及んだあらゆる地域の文化を見渡そうとする目でした。もちろんぼく自身は、その教えを体得できたという思いはまったくありませんが、いくらかでもそうした学問に触れることができたのは、本当にありがたいことでした。1970年代から90年代の初め頃まで、法寶義林研究所は、京都におけるフランス東洋学のメッカのような役割を果たしていた時代があり、そこには多くの若い欧米の研究者が毎日のように訪れていました。その常連だったアラン・グラパールさんやベルナル・フォールさんは、その後、アメリカに渡られ、こんにちのアメリカ、ひいては欧米の日本の宗教学や仏教学の隆盛を築いた重要人物になりました。この2人は、アメリカ東洋学に現代思想、とくにフランスを中心としたいわゆるポスト・モダン思想の理論を取入れることに大きな貢献をしています。フォールさんによると、そのきっかけの一つは彼

講演録「日仏日本学・仏教学と私の歩み」
(彌永信美)

が京都で勉強していた頃、フーコーが京都を訪れ、フォールさんがその案内をしたことにあった、ということです。短い時間でも、誰か大きな思想や学問的伝統を体現する人と集中的に付き合うことができると、その後の研究に重要な意味をもつことがあると思います。ぼくにとってのスタン先生は、まさにそのような存在でした。スタン先生は驚くべき天才で、短い中にほとんど論証なしにきわめて興味深い発見や見解を積み上げられた論文があります。ぼくは、それらをつなぐ論理を詳しく検証する作業を重ねて、千ページ以上の本を書くことになりました。

最後に、フランク先生のことに戻ります。フランク先生のお仕事の最大の特徴は、厳密な文献学を、たとえば日本各地のお寺で配られるお札のような、実地に生きた人々の信仰や生活に深く結びつけて研究されたことだったと思います。そうした現実の人間の生活を大切に作る姿勢は、スタン先生やその他、ここでお名前を挙げたすべての先生方に共通するものです。さらに、日本や仏教文化という研究対象に対する一種のあこがれにも似た強い情熱、あるいは驚きの眼差しが、これらの先生方から学んだ最大のたまものだったと思います。それをどう生かしていけるか——ぼく自身はもう残り少ない人生なので、そうしたものを若い方々にどう受け継いでいただけるかが、今一番大切なことと思っています。

ご清聴、ありがとうございました。

付記：シンポジウムの中では、いくつかのスライドをお見せしながらお話しました。その最後に、ぼくの話では直接触れることがなかったスライドをお見せしました。1927年の日本におけるシルヴァン・レヴィとポール・ドミエヴィルが写っている写真です。他の人物の名前、また一枚目の写真の場所は残念ながら分かりません。これらの写真は、2010年代の初めのことだったか、デュルト先生が「昔の『法宝義林』関係の資料を整理していたら見つかったので送ります」という送り状を添えて、写真のコピーを送ってくださったもので、それをまたコピーしたので画質は大変悪いですが、貴重な記録だと思います。シンポジウムで使ったスライドは、ここにも掲載しますので、人物の特定などについてご存知の方がおられましたら、ご教示をお願いしたいと思います。

東洋学関係の講演会・ワークショップ

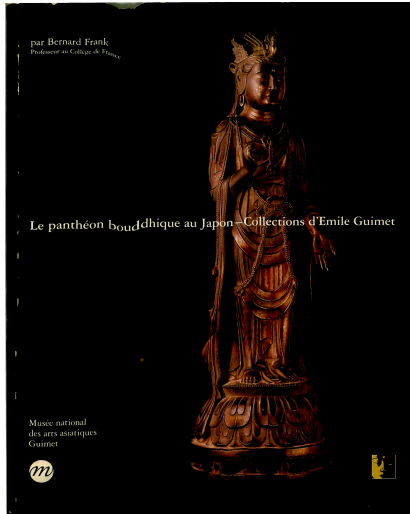


写真 1: ギメ美術館蔵日本の仏像
(Bernard Frank 著カタログ)



写真 2: ベルナール・フランク先生
(1927-1996)



写真 3: ユベール・デュルト先生
(1936-2018)



写真 4: 相国寺の塔頭 林光院の離れ
橋本獨山 (1869-1938) が西園寺公望のため
に建てたという

講演録「日仏日本学・仏教学と私の歩み」
(彌永信美)



『大鏡』に村上天皇の天福年間（947-56）御所清涼殿前の梅の木が枯れ、代わる木を求められたところ、紀實之の娘の願の梅が運ばれ、勅命により御所に移植されたところが、その梅の枝に
動なれば いともかしこし 鶯の
宿はとほば いかがこたえん
との歌が書かれた短冊を見て、天皇はその詩情を憐れみ、この梅をもとに返されたという。

写真 5: 林光院の鶯宿梅（おうしゅくばい）



Berlin 1938 – San Francisco 1991

写真 6: アンナ・ザイデルさん



Anna Seidel

Membre de l'Ecole Française d'Extrême-Orient.
Née à Berlin, le 31 juillet 1938,
décédée à San Francisco, le 29 septembre 1991.

写真 7: アンナ・ザイデルさん

東洋学関係の講演会・ワークショップ

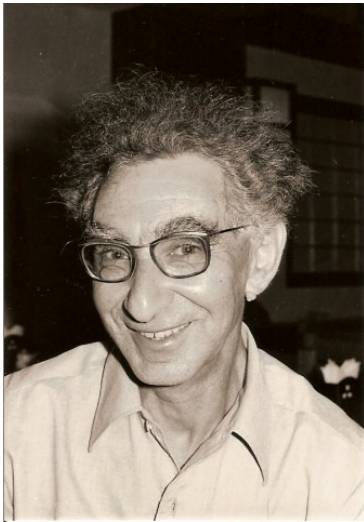


写真 8: ロルフ・スタン先生
(1911-1999)



写真 9: 「山口益先生追悼の会」京都大学楽友会館にて、赤松明彦先生撮影（1977 年 10 月 21 日）前列：長尾雅人先生、ラモット先生、デュルト先生、後列：加藤純章先生



写真 10: 「山口益先生追悼の会」京都大学楽友会館にて、赤松明彦先生撮影（1977 年 10 月 21 日）前列：長尾雅人先生、吉川幸次郎先生、ラモット先生、後列：デュルト先生

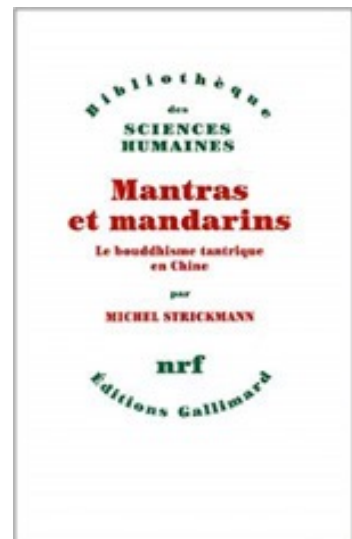


写真 11: ミシェル・ストリックマンさん（1942-1994）著書

講演録「日仏日本学・仏教学と私の歩み」
(彌永信美)



写真 12: デルト先生、彌永、ベルナール・フォールさん（2007 年 10 月 7 日、東京、駒込の中華レストランで——ドミニク・ステアヴさん撮影）



写真 13: 法寶義林編纂チーム（シルヴァン・レヴィ、ポール・ドミエヴィル、など）1927 年



写真 14: 法寶義林編纂チーム、御殿場の別荘にて（シルヴァン・レヴィ、ポール・ドミエヴィル、など）1927 年

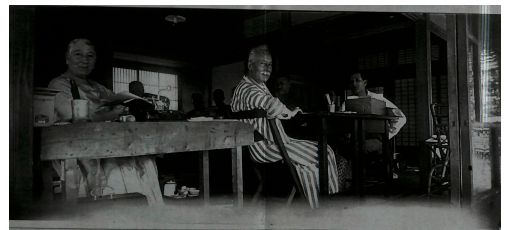


写真 15: 法寶義林編纂チーム、御殿場の別荘にて（シルヴァン・レヴィ、令夫人、ポール・ドミエヴィル）

日仏東洋学会特別講演 Lu Xun 魯迅 et sa réception trans-nationale: de la critique de la modernité au développement des sciences sociales

Sebastian Veg

2019年10月22日、当会主催・東洋文庫後援にて、フランス社会科学高等研究院のセバスティアン・ヴェグ教授を東洋文庫に招き、特別講演会「Lu Xun 魯迅 et sa réception trans-nationale: de la critique de la modernité au développement des sciences sociales」を開催した。当会会員の中島隆博と牧野元紀が協同企画し、中島隆博が司会を務めた。

日時：2019年10月22日（火）18時30分～20時00分

会場：東洋文庫2階講演室

使用言語：英語

講演者：Sebastian Veg（École des hautes études en sciences sociales 教授）

演題：“Lu Xun 魯迅 et sa réception trans-nationale: de la critique de la modernité au développement des sciences sociales”

司会：中島隆博（日仏東洋学会代表幹事、東京大学東洋文化研究所教授）

運営：牧野元紀（日仏東洋学会評議員、東洋文庫文庫長特別補佐、昭和女子大学准教授）

（文責：牧野元紀）

国際ワークショップ「外語の熟達から世界の統制へ
——近世の東アジアにおける対訳辞書と語彙集を考える」

2019 年 10 月 27 日、東洋文庫において、フランス国立極東学院・東洋文庫の共催、
当会・日仏会館・フランス国立日本研究所の後援にて国際ワークショップ「外語の熟
達から世界の統制へ——近世の東アジアにおける対訳辞書と語彙集を考える」が開催
された。当会会員のフランソワ・ラショウと牧野元紀が協同企画し、総合討論の司会
を務めた。

日時：10 月 27 日（日） 10:00～18:00

場所：東洋文庫 講演室

登壇者・発表一覧：

平野健一郎（東洋文庫）：開会の挨拶

牧野元紀（東洋文庫・昭和女子大学）、フランソワ・ラショウ（フランス国立
極東学院）：司会

岸本恵実（大阪大学）：『羅葡日辞書』の翻訳と日本イエズス会教育

フランソワ・ラショウ（フランス国立極東学院）：日本イエズス会衰亡史と『日
葡辞書』の編纂

大島幹雄（ノンフィクション作家）：ロシア使節レザーノフが編纂した露日辞典
ミケーラ・ブッソッティ（フランス国立極東学院）：中羅（伊）辞書の草稿に関
する一考察（17～18 世紀を中心に）

マリア・テレサ・ゴンザレス＝リナーヘ（マドリッド大学）：「花咲く中華文明
の影に」——スペイン宣教師による中国語辞書の草稿を考える（17～18 世
紀を中心に）

吉川雅之（東京大学）：英粵辞典・語彙集の歴史——文献学から見た 19 世紀標
準広東語の構築

モルテン・セデルブロム＝サーレラ（中央研究院）：フランスにおける満州語の
研究（1789-1810）——「補助言語」の辞書編纂法と文法の研究

クリストフ・マルケ（フランス国立極東学院）：閉会の挨拶

企画者：フランソワ・ラショウ（フランス国立極東学院）、ミケーラ・ブッソッティ
（同）、牧野元紀（東洋文庫）

共催：フランス国立極東学院・公益財団法人東洋文庫

国際ワークショップ報告「外語の熟達から世界の統制へ」

後援：日仏会館・フランス国立日本研究所・日仏東洋学会

(文責：牧野元紀)

2019 年度日仏東洋学会総会について中止のお知らせ

当初、以下の通りに日仏東洋学会総会ならびに講演会を開く予定でございましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、開催を中止いたしました。今後の予定につきましては、決まり次第会員の皆様にご連絡差し上げる予定です。

【日時】 2020 年 3 月 22 日（日） 13 時～19 時

【会場】 東洋文庫・東洋文庫講演室 （東京都文京区本駒込 2 丁目 28-21）

【総会】 13 時～14 時

- (1) 2019 年度の活動報告・決算報告
- (2) 2020 年度予算案
- (3) 2020 年度活動案
- (4) その他

【講演会】 14 時 30 分～16 時 井川義次先生（筑波大学教授）「シノロジーの形成とその契機となったもの」

【観覧】 16 時半～17 時 ミュージアム観覧 （「大清帝国展」の入場券を東洋文庫から会員のみなさまに御提供いただきます）

【懇親会】 17 時～19 時 懇親会 オリエンタル・カフェ

日仏東洋学会 会計報告

日仏東洋学会平成30年度決算報告

日仏東洋学会平成30年度(2018年度)決算

◇収入

普通会員会費	107,000
前年度繰越金※	507,925
利子	3
計	614,928

※昨年度475,141円計上後判明32,784円分増額計上

◇支出

印刷費	89,775
通信費	23,383
会議費	63,076
消耗品費	0
支払報酬費	0
雑費	0
旅費	0
HP維持費	0
予備費	0
計	176,234

総収入－総支出：614,928円－176,234円＝438,694円
平成30年度残金438,694円は平成31年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。

2019年 3月 15日
日仏東洋学会監事

森 由利 亜 

2019年 3月 15日
日仏東洋学会監事

グヴァレ デビッド 

編集後記

○ 日仏東洋学会『通信』第43号を御届けします。本号では、西田愛・今枝由郎・熊谷誠慈三氏の共著論文を掲載することができました。フランス国立図書館所蔵の敦煌出土古チベット語文献の訳注です。言うまでもないことですが、フランス国立図書館所蔵の敦煌文書は、フランス東洋学の碩学ポール・ペリオ（Paul Pelliot 1878-1945）が敦煌莫高窟にて自ら蒐集したものであり、世界中の敦煌文書コレクションの中でも特に逸品が揃っていることで有名です。本論文で取り上げられたPelliot tibétain 24も、チベットにおける初期の仏教伝道の様子を知る上で重要な文書の一点であり、詳細な研究を掲載することができたのは幸いです。

また、去る2019年3月30日に京都大学で開催された日仏東洋学会シンポジウム「日仏東洋学を振り返る——ユベール・デュルト先生を追悼しつつ——」における講演録を4本掲載することができました。それぞれ講演内容をもとに内容を一部再構成してより読みやすいものになっておりますので、あわせてお読みいただければ幸いです。さらに、特別講演会と国際ワークショップの報告を各1本いただきました。執筆者の先生方には御礼申し上げるとともに、今後とも関係者の先生方には、本誌の誌面充実のために、シンポジウムや講演会の参加記などを積極的にご寄稿いただきたく存じます。

○ 2020年に入って、新型コロナウイルスの感染症が世界中で猛威を振るっており

ます。日本でも不要不急のイベントや集会は自粛を要請され、さらに本編集後記を執筆している3月26日現在、東京では「感染爆発の重大局面」として都民に外出自粛の要請が出されております。2020年8月開催予定であった東京オリンピックも、ついに延期の決定がなされました。本会の総会もこのような情勢を踏まえ、中止の決定を余儀なくされました。大変残念ではありますが、止むを得ないことかと存じます。事態の収束が見えぬ中、大学や研究・教育機関などでは対応に様々ご尽力されている先生方も多くおられるかと存じます。お疲れの出ないよう、どうぞご自愛くださいませ。

○ 先の見えない社会状況にもかかわらず、本誌43号を予定通り出版できる運びとなったことは望外の喜びです。大変な状況の下であるからこそ、我々研究者はかえって普段通りに自らの研究を遂行すべきであると考えます。その点については、若干誌面を変更しつつ本年度も変わることなく本誌を発行することができるのは、会員の皆様の研究へのあくなき情熱と本会への熱心なご支援の賜物かと存じます。この場を借りて篤く御礼申し上げます。

（岩尾一史）

日仏東洋学会 通信 第43号
2020年3月31日

日仏東洋学会入会申込み・会費納入受付

〒223-0061 横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学 来往舎 酒井規史研究室
sakanori@fbc.keio.ac.jp
推薦に関しては会員にご相談下さい。

『通信』へのご寄稿

- E-mail による投稿は下記まで
kazushi.iwao@gmail.com
- CD-Rom による投稿は下記まで
〒600-8268 京都府京都市下京区七条大宮東入ル125-1
龍谷大学文学部 岩尾一史 宛

発行者 中谷 英明
本 部 〒223-0061 横浜市港北区日吉4-1-1
慶應義塾大学 来往舎 酒井規史研究室
印刷所 有限会社ヤマダスピード製版
〒815-0031 福岡県福岡市南区清水
TEL: 0120-939-834 FAX: 092-511-5977

